
緋弾のARIA ～薬物科の武偵～

緋村 梢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜薬物科の武偵〜

【Nコード】

N4352Z

【作者名】

緋村 梢

【あらすじ】

東京武偵高校に新たに増設された学科＜薬物科^{メデイシン}＞。

元々、国家資格である薬物取扱者資格を取得できる＜東京薬物専門高校＞という高校があった。

だが、少子化による生徒減少により経営が困難となり、国立である武偵高と統合することとなった。

薬専高に通っていたく姫神^{ひめがみ} 薫^{かある}（17）もまた例外ではない。

薫の所得済みの資格は危険物取扱全種、薬剤師、有機溶剤作業主任者、麻薬取扱者、毒物劇物取扱責任者等を所有している。

というか、学校が強制で取らせるのだが・・・。
そんな普通の高校生生活からかなりかけ離れた薫は、これからもっと
普通の高校生からかけ離れるとは、夢にも思っていなかった・・・。

<作者メッセージ>

こんにちは、私は国語力・文章力などの小説に必要な要素が欠けて
います。

ですが、私は自分のできる限りの力を出し切って書きたいと思うの
で、目を瞑ってください。

1弾 Prologue

とある日、俺は引越し屋のトラックに揺られながら、眠っていた。

今年から俺は東京武偵高校に新設された学科・・・<薬物科^{メデイシン}>に所属することになった。

そうなった理由は、少子化により 全校生徒数が800人から一気に290人に減ったからだ。

それもそのはず、今年入る予定の一年生は、18人で、今年卒業したのは、500人、在校生はたった290・・・。

それに新生を足しても、308人・・・。

少なすぎる・・・。

それに、今在校している生徒の中には海外の研究機関に行く者もいる。

その為、大体在校生は200人居るかいなか・・・。

3年は120人、2年は俺を含め、62人、1年は18人となった。

その為、経済的な余裕がなくなって、廃校となった・・・。

だが、武偵局の計らいで、武偵高と統合するとなった・・・。

さすが、校長の人脈・・・。

その人脈を生徒集めには役立てんのかね……。

俺はそう考えていた。

すると、トラックは停まった。

「着いたぞ、ガキ」

「見りゃわかるって……」

俺はそう呟いて、トラックから降りた。

しかし……、薬専校の寮よりきれいだな……。

「おら！さっさと運べよ！」

ちまちまうるせい奴だな……。

「分かってるって……」

俺は渋々、荷物を運ぶ。

運ぶと言っても、アタッシュケース×8と実験用具セット、白衣と私服だ。

そんなに数は無いが、アタッシュケースは一つ10kgある。

俺はそんなアタッシュケースを4つ同時に持って、今日から住まう部屋に運んだ。

部屋は遠山っていう人の隣だ。

すべての荷物を運び終え、運送業の男性を見送りに、外に出た。

「んじゃあ、達者で暮らせよ」

「言われなくても分かってますって・・・」

「しかしまあ・・・、なんでお前は行かなかったんだ？」

「何にだよ？」

「寮だよ、寮。折角、校長が学校の土地を売り払って、買ってくれたんだからよ。ちったあ校長の恩も着ろよな」

「んなこといったら、校長に迷惑掛けっ放しになんだろ・・・」

「そうだな・・・」

「また何かあったら連絡するよ」

俺がそういうと、男性は「おう」と言って去って行った。

さてと、俺も部屋の片づけするかな・・・。

俺はそう考え、部屋に戻った。

部屋に戻り、俺はアタッシユケースをクローゼットに入れた。

そして、ある程度、部屋を片付けたあと、チャイムが鳴った。

俺は時計を見た。

時刻はPM1:29を回っていた。

確か武偵高説明会はPM2:30からであったような気がする。

てことは、恐らく……

俺はそう考えつつ、玄関を開けた。

そこには、セーラー姿の少女が居た。

「よう、春風。何の用だ？」

「おっつゝ。今日は薫が来る日って聞いてたから、来てみたの。そしてついでに、いっしょに武偵高に行かない？」

「別にいいぞ。すぐ着替えるから待ってる」

俺はそう言い残し、リビングで着替えを済ませ、学ランを着る。

東京薬物専門学校は学ランである。

女子はセーラー服。

まあ、これを着るのは今日が最後だろう。

説明会の時に制服の採寸もするって言ってるしな・・・。

そして、俺は玄関に出て、春風と共に武偵高に向かった。

武偵高に到着し、体育館に入った。

すでにほとんどの生徒が集まっていた。

俺は自分の学年のところの椅子に座った。

周りの奴はみんな顔見知りだ。

といっても、当たり前なことなのだが・・・。

そして、説明が始まった。

この武偵高では、＜薬物科^{メデイシン}＞は、衛生学部になるらしい。

薬物高では、全員が薬剤師の資格を取得しているため、納得できるのだが、劇毒物を扱う奴は少し頭を捻るだろう。

まあ、俺はどうでもいいんだが・・・。

その後、制服の採寸をして、設備説明を受けた。

その途中・・・・・・・・迷った・・・・・・・・。

俺と春風、それに俺の親友である、くろぎ ゆきや倉木雪弥（17）、春風の親友である、あゆみ姫川（ひめがわ）愛美（17）・・・・・・・・。

「なんで迷ったんだ？薫」

「なんでだろうな・・・・・・・・、雪弥」

「そんなの決まってるじゃない・・・・・・・・」

「これはもちろん・・・・・・・・」

「「「雪弥が興味本位で廻り過ぎ！！」」」

俺と春風、愛美はハモった。

「全部俺のせいだよ！！！」

「「「それしかねえだろ！」」」

俺達がそういうと、雪弥はしょぼんとした。

「さてと、これからどうするの？薫」

「感でいくしかねえだろ・・・・・・・・」

俺は適当に、歩く。

すると、クロロベンゼンの香りがした。

恐らく、^{メデイシン}薬物科の学科塔が近いのだろう。

俺はそう考え、香りを辿った……。

1弾 Prologue (後書き)

ひめがみ かおる
姫神 薫 (17)

髪：漆黒のナチュラルスイングショート

眼色：ダークブルー

身長：172 cm

所属：薬物科2年

はるかぜ しほ
春風 詩穂 (17)

髪：漆黒のロングヘア

眼色：エメラルドグリーン

身長：155 cm B : B 70

メティシン
所属：薬物科

くまの せいか
倉木 雪弥 (17)

髪型：濃い茶色のマッシュウルフカット

眼色：ダークグリーン

身長：170 cm

メティシン
所属：薬物科

ひめかわ あゆみ
姫川 愛美 (17)

髪型：黒色のセミロングのストレート

眼色：ダークブルー

身長：153 cm B : A 60

メティシン
所属：薬物科

2弾 Second Prologue

香りを辿ると、「KEEP OUT」「HAZARD AREA」と書かれたテープで仕切られている建物に到着した。

その建物の付近には防護服を着た人が10名ほど居た。

入口のあたりに、有毒を記す絵が描かれたトラックが一台居た。

そのトラックの荷台から、防護服を着て、フォークリフトを運転している人が、何かを運び出した。

「ありゃなんだ？」

「薬物科なら自分で考える」

俺は雪弥が聞いてきたため、そう返す。

目を凝らして、トラックに書かれた文字を見た。

そこには<トリクロルエチレン>と書かれていた。

「……さっさとここから離れるぞ」

俺は振り返り、その場を離れた

「お、おい！」

雪弥は慌ててついてきた。

もちろん、春風と愛美もついてくる。

「一体どうしたの？薫」

「お前も自分で考えろ」

「ケチくさいな、教えてよ」

俺は立ち止り、振り向く。

「仕方ねえな……。ありゃトリクロルエチレンだ。それも高濃度のな」

俺がそういうと、3人は驚いた表情をする。

「おいおい……。なんでそんなもんがあんだよ……。？」

「俺が知るか。恐らく、劇毒物取扱関係だろ。それより、早く合流しないと……」

俺は携帯を取り出す。

すると、3件ほど着信があった。

「風宮からだ」

「風宮から？なんでお前が風宮の携番知ってんだよ？」

「別にいいだろ。それより、電話してみないとな……」

俺は風宮に電話をかける。

『おーやつと繋がった。お前らどこに居んだよ?』

「悪い、恐らく薬物科塔から西に500mのところだと思う」

『もう薬物科塔メデイシンに行ったのか!?』

「ああ。お前らも行っただろ?」

『それがよ、今は立ち入り禁止らしいんだ。なんか劇薬を納庫してるらしくてな』

「それなら見たぞ」

『本当か!?で、薬品はなんだ?』

「トリクロルエチレンだ。それも高濃度のな」

『おいおい……マジかよ……。お前らよくそんなところ行けたな……。もし俺がお前らだったら逃げ出すっての……。』

「俺達も逃げてきたところなんだよ。高濃度のトリクロルエチレンつつつたら、毒分類だからな。それよりお前らどこいんだよ?そっちと合流すつからよ」

『ああ、ここは確か……。強襲科実習場……。次は救護科アンビュラスの学

科塔に行く予定だ』

「分かった。なら俺達は救護科アンビュラスの学科塔に直接向かう。案内人には伝えといてくれ」

『了解。んじゃあな』

そう言っつて、風宮は通話を切った。

「さてと・・・」

俺はポケットから地図を取り出し、開く・

今俺達が居るところから救護科アンビュラスの学科塔まではそれほど離れては居ない。

「んじゃあ行くか」

「じゃあ俺が先頭を・・・」

雪弥がそういうと、空気が重くなった。

「・・・やっぱ薫が先頭でしょ」

「そうだね」

「おい・・・なんで俺じゃダメなんだよ・・・？」

「デジャブを見たからよ」

春風がそついうと、愛美が相槌を打った。

「んなことどうでもいいからさっさとあいつらと合流するぞ」

俺はそう言っ、歩き始めた。

数分後、俺達は救護科学学科塔アンビュラスに到着した。

「まだあいつ等は来てないっか・・・」

「まああいつらが先に来れるって保証はねえし。それに、あいつらは強襲科アサルトの学科塔から

来るって言ってたからもう少しかかるだろう」

「そんなに遠いのか？」

「約0・9 kmだ。まあ気長に待とうや」

俺はそう言っ、近くのベンチに腰掛け、上を見る。

木陰が涼しいな。

すると、隣に春風が座った。

「薫、どうして寮に来なかったの？」

「どうしてって・・・」

「そつだぞ。お前が居ねえから春風がさみ……」

雪弥が何か言おうとした瞬間、春風がボディーパーカーを食らわした。

「お、おい……」

「何でもないって、ねえ？ゆ・き・や！」

そつ言っている春風……怖エ……。

「あ……ああ……」

雪弥は苦しそくに腹を押さえて言う。

「そ、そうか。発言には気をつけろよ」

「そつする……」

「で、なんで校長の用意してくれたマンションに入らなかったの？」

「それは……、校長に迷惑をかけたくないからで……」

なんだか苦しい逃げ方だな……。

「ふ〜ん……。でも、薫のために一か所だけ部屋が空いてるんだけど……」

「ああ、あの部屋は後輩にでも使わせてやってくれ。俺はあそこに入る気は始めからないからな」

「わかった。でももし、来たくなったら、事前連絡してね。そんな時は部屋のあて、探すから」

「そんな時は頼むな」

そんな話をしていると、風宮達がやっと来た。

その後、いろいろな説明を聞いて、寮に戻った……。

寮に帰り、俺は学ランを脱いで、段ボールに畳んで直した。

「もう……使わないからな……」

俺はそう呟いて、私服に着替え、制服とズボンを洗濯機にかけ、寝室のベッドに倒れた。

武偵高の制服は明日には届くらしいしな……。

あと、銃刀所持が校則で決まっていて、俺は無難にベレッタM8000という銃とW2鋼という素材を使ったバタフライナイフを頼んだ。

てか、薬物を扱ううえで、火気は厳禁だ。

だから、銃には恐らく弾は込めない。

でも、そしたら意味ないか・・・。

俺はそう思いつつ、眠りに就いた・・・。

3弾 Medicine

翌日……

早くも小包として制服と銃刀が届いた。

銃刀には、ホルスターという装備のための収納アイテムが付いていた。

俺は試しに制服を着て、武装してみる。

我ながら、様になっている事に驚いた……。

ってこんなことしている場合じゃねえ。

俺は急いでスーツに着替えて、部屋を出た。

寮の下にはタクシーが停まっていた。

俺はそのタクシーに乗り込む。

そして俺を乗せたタクシーは走り出した。

今日は、青森まで里帰りだ。

どうやら、俺のことを星伽神社に紹介したいらしい。

まあ、父さんと母さんは星伽の専属薬剤師だから……。

後継ぎの俺を紹介したいのも無理は無いつか……。

しばらくして、タクシーは成田空港に到着した。

料金を払い、手ぶらで空港に入り、チケットを買って、機内に向かった。

俺はそこまで金持ちでもないため、エコノミーに座った。

それも格安で訳ありの奴をな……。

俺はそう思いつつ、外を眺めた。

成田空港から青森空港までは約2時間弱掛かる。

だから、それまでは暇なのである。

そういえば、里帰りするのって今回が初めてだ。

初めてというか、去年、日本唯一の薬物専門の学校である東京薬物専門高校に入学するために上京してきた。

だがその学校も一年経って廃校になった……。

何のために俺は東京に来たんだか……。

ハア……、下手したら帰って来いって言われるんだろうな……

。。。

嗚呼・・・、なんだかそう考えたら帰りたくなってきた・・・。

しかし、もう乗っちまった・・・。

あっち行ったら、恐らく迎えが来てるからエスケープ不可だろ。

あの二人・・・元気にしつてつかない・・・

そして・・・青森空港に到着した。

手ぶらのため、荷物を取りに行くこともせず、出口を出た。

相変わらずつてところかな・・・。

俺はそう思いつつ、タクシー乗り場に向かった。

タクシー乗り場に着くと、がら〜んとしていた。

「全然いねえし・・・。なんでだ・・・？しゃあねえ・・・、歩いて行ける所まで行くかな」

俺はそう呟いて、歩き出した。

まあ東京より少しだけ、自然が多いくらいだ。

俺はそう思いつつ、歩いていると、黒塗りのプリウスαが目の前に停まった。

「よう、薫」

車の窓から顔を出して、言ってきた男性……。

俺の父さんである姫神 彰あきひである。

奥にはにっこりと微笑む女性……

俺の母さんである姫神 郁いくである。

「なんで今なんだよ……」

「悪い悪い。ちょっと道が混んでてな」

「まあいいけど」

俺はそう言って、車に乗り込んだ。

「で、話は変わるけど、薬専高が廃校になったって本当？」

母さんは後ろを振り向いて俺に問いかけてくる。

「ああ。だけど、東京武偵高に新設された薬物科メデイシンに全員移動になった。だから、今まで通りだって」

「それならいいんだけど……」

「そういえば、星伽家の長女が東京武偵高に居るらしい。まあ縁あったら仲良くしてくれよ」

「はいはい、縁があつたらね」

俺はそう答えて、外を眺めた。

しばらく走ること、約40分……。

俺の実家に到着した。

俺は車から降りる。

「まあたつた一年ぶりなんだからあまり変わっちゃいない」

まあそうなんだろうが、格式ある家にしかない風情がある。

単に古いだけだが……。

俺は久しぶりに、自分の部屋に戻った。

俺の部屋は漢方薬草の本などがたくさんある。

小さい頃からこういうのを教えられてたからな……。

俺は小さい頃に使っていたベッドに座り、漢方の本を読む。

その本は専門的な表示が言葉も入っている。

今でも分からないこともな……。

俺はこれ以上みていると目が回る為、本を閉じた。

生成方法と調合は、母さんから習っている。

薬草の見分け方も小さい頃から父さんから習っている。

その為、薬を作ろうと思えば作れる。

すると、ガチャツとドアが開いた。

「薫、そろそろ星伽神社に行きましょうか」

「わかった」

俺は母さんにそう返事をして立ちあがり部屋を出た。

家を出て、徒歩で星伽神社に向かう。

星伽神社は由緒正しい家柄であり、その専属薬剤師をしている父さんと母さんはとても優秀なのだと感じる。

感じるんだが……、母さんに至っては天然要素を感じる。

その辺を突っ込んだら母さんは泣くであろう……。

というわけで黙っておく。

しばらく自然に囲まれた道を歩くと、神社が姿を現した。

これが＜星伽神社＞である。

星伽家は代々、緋の巫女・・・通称＜緋巫女＞の血を引いている家系である。

そして、俺の家系である姫神家は星伽と並行して代々、薬草を基に薬剤を作ってきた家系である。

詳しいことは＜姫神家伝代録ひめがみけでんだいろく＞に書いてあるのだが、どうして星伽と関係
を築いたかは記されて居なかった。

まあそんなことを知ったからといって、俺が姫神家の後継ぎになることは絶対である。

一人っ子ってのもなんか不便だな。

だって後継ぎが一人しか居ないんだからな。

ま、今さら嘆いたって何も変わらん。

俺はそう思いつつ、父さんと母さんの後をついて行く。

そして、神社の近くにある家に入る。

中に入り、応接間なところに連れられ、正座をして座った。

ここに初めて来たのは、8年前だ。

確かあの時は、母さんと父さんの付き添いで、薬を持って来た時だ。

俺がそんなことを考えていると、ふすまが開き、巫女姿の女性と少女が入って来た。

そして対面するように座った。

「さて、彼が彰の息子か？」

「はい。名を薫と言います」

俺は一礼をする。

そして、ある程度話を聞いて、俺は東京に帰った。

帰りついたのは、夕方4時半であった。

まあ、普通だろう。

あ、そういえば夕食を買ってなかったな……。

まあいいか……。

明日始業式だからな……。

それに、クラス編成の説明を聞きに行かないとな……。

そして翌日……

俺は朝8：00に武偵高制服に着替えて武装し、家を出て、武偵高に向かった。

学校に到着して、張り出されたクラス表を見る。

俺は2年A組……。

しかも……俺一人だけ……。

なんでだよ……。

「薰……一人なんだね。かわいそうに……」

と背後から声がした……。

「春風、そういう方がぐさりと来るって……。それよりお前どのクラスだ？」

「私はC組だよ。雪弥と愛美も同じ」

「そうか。まあ俺はなれてっからいいんだけどな」

「まあお互いに頑張ろう。それじゃあね」

そう言つて、春風は去つて行つた。

俺は教室に向かった。

時間带的には、武偵高生徒がすでに登校している時間帯だ。

だから周りには元薬専高の奴らしか居ない。

そして教室の前に立つ。

すると横から小学生くらいの少女がやって来た。

放すこともないので無視しておく。

そして先生が少女の名であろう名と俺の名を呼んだ。

少女が入った後に、俺も続いた。

「彼女は強襲科アサルトの神崎・H・アリアちゃんです」

女教師がそういうと、一人の男子がずるりと椅子から滑り落ちた。

「遠山君、どうかしたの？」

女教師が滑り落ちた男子に問いかける。

「べ、別に……」

男子はそう答えた。

「それならいいんだけど……。そして、彼は今年から武偵高に新設された薬物科^{メデイシン}の姫神 薫君です」

俺は一応、一礼した。

「それじゃあ席は……」

「先生、あたしあいつの隣がいい」

と神崎という少女がそう言った……。

すると、その男子の横に座っていた大男が立ちあがった。

「よ、よかったなキンジ。なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ……!」

大男は男子の手を握りながらぶんぶん振る。

「先生！俺転入生さんと席代わりますよ……!」

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねエ」。それじゃあ変わってもらえるかしら？」

「ええもちろん!」

大男はそう言っつて、少女が俺が座るはずの席に座った。

少女はとことこと男子のところまで歩いて行く。

そして、立ち止った。

「キンジ、これさっきベルト。返すわ」

べ、ベルト！？

まさかそんな関係なのか！？

「理子分かつちゃった！これ——フラグばっきばきに立ってるよ——！」

と窓際の少女が言いだした。

やっぱりそうなのか！

「キーくん、ベルトしてない！そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！これ謎でしょ

謎でしょ！？でも理子には推理できた！できちゃった！キーくん

は彼女の前でベルトを取るような

何らかの行為をした！そして彼女の部屋にベルトを忘れて行

った！つまり二人は熱い熱い恋愛の真っ最中なのだよ——！」

以外に武偵って大胆なんだな……。

俺はそう思った。

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間に!？」

「影が薄いヤツだと思ってたのにッ」

「女子どころか他人に興味がなさそうなくせに裏でそんな事を!？」

「フケツ!！」

すると少女は太もものホロスターから銃を取り出し、撃った。

ズキューンという銃声が鳴り響いた。

怖ッ!!

俺は二・三步下がった・・・。

「れ・・・恋愛なんてくだらない!!全員覚えておきなさい!!そんなことを言うヤツには…風穴あけるわよ!!」

神崎は顔を赤くして、そう叫んだ。

「ごめんなさいね。こついうのは日常茶飯事だからあまり気にしないでね」

と先生はにっこりとほほ笑んだ。

「あはは・・・」

気にしないってところが無理だ!!

「まあ薫君は、窓際のあの席でいい？」

「ええ。別にかまいません」

俺は空いている席に座った。

後ろにはさっき迷推理をした少女の前である。

そして、午前の授業が終わり、俺は教務科マスターズと呼ばれる教科塔に来ていた。

まあなんていうか・・・、薬物科の担当教諭に書類を提出しに来たのだ。

本当は昨日の昼に提出する書類であつたのだが、俺は実家に帰っていたので提出できなかったのである。

その為、今に至ったわけだ。

俺は教務科のドアをノックし開ける。

「メデイシン薬物科2年の姫神です」

俺がそういうと、真正面に居る白衣の下ぶち眼鏡の男性がキュウリを生噛りしながら手を振っている。

「こつちこつちィ」

と男性が言ったため、俺は男性に歩み寄った。

「これが書類です」

俺は書類を渡した。

「はいはい」

男性は書類を受け取って、眺める。

「はい、確かに受け取ったよ。あ、これは薬物科^{メデイシン}の学科塔に入る為のカードキーね」

男性はそう言って、一枚のカードキーを渡してきた。

俺はそれを受け取る。

「そういえば自己紹介が遅れたね。僕は元薬物総合研究所教授の江川 浹。よろしくね」

「こちらこそよろしくお願いします」

俺はそう挨拶をして、教室に戻った。

そして、すべてが終わわり、俺は寮に戻った。

遠山という人は、男子の質問攻めからうまく逃げた。

俺はいくつか質問されたが、ほぼ遠山という人の方に行ったため、助かった。

だが、彼は不幸な人間だな……。

俺は寮の部屋に入り、ブレザーを脱いでソファに座って、テレビを点ける。

そして、横になり目を瞑る。

翌日・・・

俺は知らないうちに寝てしまっていた・・・。

時計を見ると時刻は朝7：30を回っていた。

俺はゆっくりと準備をして、学校に向かった。

今日からは学科の授業が入ってくる。

やっと本来の授業ができるというものだ。

だが、トリクロルエチレンが搬入されているため、警戒はしておいたほうがいいだろうな・・・。

そして、午後の授業になり、俺達は薬物科の学科塔に白衣姿で入る。

俺は第一研究所第二研究室で、インフルエンザを殲滅する薬品開発部門にまわされた。

第一研究所第二研究室・・・・

「先輩、このサンプルの結果は効果なしです」

そう一年の雨浪 隼しゅんが言った。

「そうか・・・。なら、そのサンプルは適正に処理してくれ」

「分かりました」

隼はそう返事をして、去って行った。

俺は電子顕微鏡で撮影されたPCのディスプレイを見ながら、インフルエンザウィルスの動きを観察する。

この研究室に居るのは俺と隼だけだ。

そもそも隼は、俺のパートナーだ。

薬物を扱うに当たり、パートナーは必須なのである。

いざ倒れたときとかに助けが居なかったら困るからな。

だから、研究室に居る時は必ず2人で行動しなければならない。

「さてと、次はこの薬草を試してみるか・・・。隼、次のサンプ

ルを作るぞ」

「分かりました」

俺はインフルエンザウイルスを高濃度に抽出した液体をガラス皿に1滴垂らし、周りに薬草から抽出した液体を周りに流しこんだ。

「後は結果を待つだけだな……」

「そうですね」

「んじゃあ帰るか」

「え？もう帰るんですか？」

「ああ。根を詰めすぎたら事故につながるからな。無茶は禁物だ」

「そうですが……、他の研究室はまだ実験中ですよ」

「んなこと俺が知ったことか。他は他、うちはうちだ。それ以外の理由は無い」

俺はそう言っ、白衣をロッカーにかけ、ブレザーを着る。

「……分かりました。また明日ですね」

「そうだ。まあ、明日は今日より倍以上のサンプルを用意するつもりだ。それで一気に済ませる。いいな？」

「はい、構いません」

「よし、じゃあ戸締りは俺がするから先に出ろ」

「分かりました」

隼はそう言って、即座に着替えて、帰って行った。

俺も戸締り、機械を確認して寮に帰った。

俺はこの時……、人生最大のバスジャックに遭遇するとは夢にも思わなかった……。

3弾 Medicine (後書き)

江川 浹えがわ きよう (20)

髪：銀髪のショートヘア

眼色：エメラルドグリーン

身長：167cm

所属：薬物科メデイシン教諭

雨浪 隼あめなみ しゅん (15)

髪色：藍色のショートヘア

眼色：ダークブルー

身長：153cm

所属：薬物科メデイシン

4弾 D e s p a i r

翌日、外は雨が降っていた……。

それも土砂降りだ。

だが、バスに乗ってしまえば、雨なんぞ関係ない。

俺は制服に着替え武装し、黒塗りのアタッシュケースを所持し、バス停に向かった。

そして丁度、朝7：58になりバスが来た。俺は一番後ろ側に座った。

ハア……。今日から徹夜になるな……。

俺は目を瞑った……。

しばらくバスに揺られていると、誰かの携帯が鳴った。

うるさいな……。マナーモードは無いのかね……。

しかし、その電話を取り出した少女が脅えている。

一体何があったんだろうか……。

やけに騒がしくなってきた……。

「みんな、落着いて聞けよ……」

そう言ったのは、俺と同じクラスの大男、武藤剛気であった。

「このバスに爆弾が仕掛けられてやがる・・・」

武藤がそういうと、周りは脅え始める。

「落ち着け！とにかく片っ端から車内を探せ」

武藤がそういうと、座席の下や網棚の上を探し始めた。

俺は中央に立って、ただ見ているだけである。

たった爆弾如きでビビリすぎじゃないか？

「どうだ、見つかったか？」

武藤がそう呼びかけると、全員は首を横に振る。

「じゃあどこにあんだよ・・・！」

武藤はそう嘆く。

「恐らくこのケースの爆発物設置位置は車体下だろ・・・」

俺がそう呟くと、武藤が俺に歩み寄って来た。

「それは本当か!？」

「ああ。この手の爆弾処理は俺でもできる。問題は、走行中の車体

の下にどう潜り込むか……だな」

「速度だけは落とせねエぞ」

「仕方ない……、宙釣りでやるよ。だが装備が少ない……。問い合わせてるからその間までは速度を維持してくれ」

「分かった」

俺は携帯を取り出し、雪弥にかける。

『もしもし?』

「俺だ」

『ああ、薫か……。なんのようだ?』

「今、ケースCB3に遭遇した」

CB3……、それは薬専高で決められた暗号の一つ……。

CはClose<密室>。

BはBus<バス>。

3は車を3カットした状態で、前から1エリア、中央は2エリア、後方は3エリア。

つまり、密室で走行中のバス後方に爆弾が設置してあるという意で

ある。

『おいおいマジかよ!?!』

「ああ。だから至急、解体装備とワイヤを用意して持ってきてくれ。場所はGPSで知らせる」

『了解!すぐに用意してそっちに搬送する!それまで爆^{ばく}んなよ!』

そう言つて、雪弥は通話を切った。

さてと・・・

俺は生徒手帳に入れていた解体書を見る。

基本的には起爆コードを切断する方法が無難なのだが、今回の場合、速度感知起爆も兼ね備わっている

ため、スピードを落とせるようにするのが最優先だ。

だが、コードはケースによってカラーリングが変わっているため、間違えば、即時おさらばだ。

「姫神君、僕たちはどうすればいい?」

そう問いかけてきたのは、同じクラスの不知火であった。

「これと言つては無いが・・・、お前らはなんだかこのケースを知ってるのか?」

「まあね。実は最近武偵殺しの模倣犯と思われる犯行がこの前あつ

たばかりなんだ」

「武偵殺し・・・ねえ。まあ詳しいことは助かってから聞いわ」

しばらくして、車の音がする。

俺はふと、窓の外を覗くと、銃を備えたオープンカーが並走してくる。

すると、その銃は俺に銃口を向けてきた。

「伏せろ!!」

俺がそう叫ぶと、その瞬間、銃から無数の弾丸がバスの窓を貫く。

悲鳴が車内を包みこみ、数人の方を掠めた。

そして、銃弾は止んだ。

「行っただか？」

一人の男子が俺に問いかけてきた。

「いいや・・・、ロードノイズが消えねえ・・・。今も並走してやがる」

俺は鞆の中から試験管に入った薬剤と布に包んであった錠剤を取り出し、混ぜて外に放り投げた。

その瞬間、銃の銃口が試験管の方に向いた。

咄嗟に俺は懷から銃を取り出し、オープンカーのタイヤを撃ちぬいた。

オープンカーは壁にぶつかり、炎上した。

そして、ヘリがバスの上を平進し、ヘリから神崎と遠山が俺が頼んだ装備を持って車内に入って来た。

「みんな無事か!？」

遠山はそう問いかける。

「負傷者は居るけど、死者は辛うじて居ないよ」

「それならいいが・・・、この装備を頼んだのってのはお前か？」

「ああ。助かる」

俺はその装備を持って、屋根にワイヤの金具を撃ち込む。

「あたし達は何をすればいいの？」

神崎がそう問いかけてきた。

「援護してくれ。予定所要時間は約10分・・・。さっきみたいな車が来るかもしてん・・・」

「あのルノーね。わかったわ、でも、こっちが危険と判断したら戻りなさいよ」

「分かつてる」

俺はそう言つて、逆さになり、車体下を覗く。

やはり、ドデカイC4爆弾があつた。

俺は持つて来たミラーで四方八方を観察する。

コードは4本ある・・・。

内2本が速度感知だ。

俺はロングニツパを2本使つて、表面を少し削つて、電流を測る。

4本中2本が低電流であつた。

つまり、これが起爆である。

そして、高い奴が速度感知だ。

俺はその高い奴を+から切断し、-を切つた。

これで速度は関係なくなつた。

そして、起爆の方も切断した。

その後、バスを止め、爆弾を剥し、念のため、防爆ボックスに入れた。

後はこれを解析して成分を割り出し、入手経路を探れば何か犯人につながる手掛かりがあるかもしれない……。

俺がそう考えていると、神崎が俺に歩み寄って来た。

「アンタ、爆弾解体できるの？」

「一応爆弾も薬物を使ってるからな。ある程度の解体基礎は一年の時に学んだ。それに中学時代は……」

「つて、話しても意味ないつか……。それじゃあ俺はこの爆弾を薬^メ物科学科塔第3研究^{デザイン}

所で成分解析にあたる。だから担任の先生にも連絡しておいてくれ」

「分かったわ」

俺は警察車両で学科塔に向かった。

第三研究所にたどり着き、俺は防撃服を着て防爆室に入る。

防爆室といっても、解体中に爆発したら俺は死ぬがな……。

俺は慎重にカバーを外し、薬品だけを引きぬいた。

これは結構高価な奴だぞ……。

ただの模倣犯がこんな品物を調達できるわけねエ……。

これは探りやすそうだ……。

俺はその薬物を扱っていると思われる会社に電話してみた。

80件中……該当者なし。

最近そんなものを購入している人は誰も居ないらしい……。

となると海外経由か……。

俺は薬連と呼ばれる組織に事情を説明し、聞いてみた。

そついう人物は居たらしいのだが、薬物販売法で規制されていて、その薬物を同時購入したものは爆弾

作成未遂で全員刑務所に服役しているらしい。

「千里の道も一歩からというが……、一歩で靴ひもが千切れたじやねえか……。どうするか……。」

まあ今考えたところでどうにでもなるわけが無いので、一応、教務^{マスタ}科に報告書として提出しておくか。

俺は調べたことをすべてをまとめて、書類にした。

それを持って俺は教務科に向かった。

教務科に到着して、ドアをノックする。

「入っていいぞ」

という返事が聞えたので入る。

するとそこには待つていましたと言わんばかりに構えている女教師が居た。

彼女以外は誰も居ない……。

「今朝起きた武偵殺しのバスジャックで使用された爆弾の成分結果です」

「さすが薬物科^{メデイシン}、調べが早いな。今でも鑑識科^{ケンシク}は調べてるって
いうのに」

「はあ……、それで薬物に薬品の入手経路は不明で、恐らく複数犯だと思います。ですが、それでは模倣^{モバウ}にしては悪質ではないかと」

「姫神イ、模倣犯は一人とは限らないぞ」

「そうかもしてませんが……」

「ま、この報告書は武偵局にも回してみる。まあ大した結果は期待

できないが・・・」

「それでは、私は寮に戻ります」

「授業は受けないのか？」

「今さら行ったところで、もう遅いですし・・・」

すると、チャイムが鳴った。

「そうみたいだな。まあ、何か分かったら一応連絡する」

「分かりました」

俺はそう言って、職員室を後にした。

そして、寮に帰り俺は、すぐに眠りに着いた。

しばらく寝ていると、チャイムが鳴った。

「誰だよ・・・」

俺は渋々ベッドから起き上がり、玄関に向かった。

チャイムは連続的に押され、最終的には一定音に聞えるようになった。

「はいはいわかったから・・・」

俺はそう呟きながら、ドアを開けた。

そこには神崎と遠山が立っていた。

「なんだよ？お二人さん・・・」

「アンタが帰ったって聞いたから直接会いに来たのよ。それより、あの爆弾のことなんだけど・・・」

「ああ、あれね。データはこっちに転送している、まあ中に入ってくれ」

俺は二人を部屋の中に招いた。

「お邪魔するわよ」

と言って、神崎と遠山は入って来た。

「まあ適当に座ってくれ」

俺はそう言って、寝室に置いてあるノートパソコンを持って、リビングに戻り、持ち上げる。

そして、研究室からPCに送った解析結果を開く。

「これが、今回使われた爆弾の成分表だ」

俺は成分表を見せながら言う。

「種類はC4爆弾の成分と一致する」

「武偵殺しの十八番よ」

「やっぱ今回のも武偵殺しの仕業か」

「ええ・・・」

「神崎、俺はこの爆弾の入手ルートは探れなかった。だが、お前なら何か心当たりがあるんじゃないか？」

俺がそう問いかけると、神崎は俺の目を一身に見てきた。

「恐らく、イ・ウーが関係してるわ」

「イ・ウー？なんだそれ・・・」

「アンタは知らなくていいのよ。それより、アンタは爆弾とか解体できるのね。薬物科メデイシンと思って馬鹿にしてたわ・・・」

「俺達は爆弾の作成から、解体までを習うからな」

「薬物科が爆弾解体を？どう関係あんのよ？」

「爆弾には薬物を使っているからな・・・」

「まさかとは思うが・・・お前達が模倣犯じゃないだろうな?」

遠山は疑いの目で俺を見てきた。

「んなわけあるか・・・俺はそろそろ寝る。帰ってくれ」

「わかったわ。もしまた何か分かったら連絡して」

お前の携番&メアドは知りませんよ。

「何か分かったらな」

俺はそう言っで、寢室に入り眠りに着いた。

翌日・・・

午前をいつものように授業を受ける。

しかし・・・つまらんな・・・。

さすが偏差値が低いだけはある。

俺達元薬専高が一年の初めに習ったところを今さらやっている・・・。

進行が遅すぎじゃねえか・・・。

俺は欠伸を堪えるように、口を手で押さえる。

正直……眠い……。

そして、眠気に何とか勝った俺は、休み時間に寝ることにした。

次の時間は体育である……。

俺は見学するがな。

薬専高では体力づくりのために、50?の重りの入ったボックスを背負って山を登った経験がある……。

それ以外に運動なんてしたことはない……。

するとそこへ神崎がやってきて、横に座った。

「何体育サボってるのよ」

「サボってるわけじゃねえよ……」

「なら何してるって言うの?」

「考え事……というかあの爆弾についてだ」

「武偵殺しの爆弾のこと?」

「ああ。今は設計図が無いから分かりにくいだろうが……、ありやプラスチック爆弾の中で威力が最

大のものだ」

「そんなに威力が強いのか!?」

「ああ。アレだったらあのバスはおろか、学園島ごと消せる威力がある」

「でもどうしてそんなモノをあのバスに? もし仮に、武偵以外の一般人まで巻き込むつもりなら学園島行きは選ばないでしょ?」

「これはあくまで俺の仮説だが、薬専高の生徒も狙われていたとしたら……」

「ちょっと! それどういうこと!? もしそれが本当なら……」

「ああ……」

「それならアンタも無関係じゃないわね……」

「俺も協力させてもらう。いいだろ?」

「ええ、構わないわ。ねえ、明日暇?」

「あ、ああ……。特に予定はない」

「そう。なら明日付き合いなさい」

「どこにだよ……?」

「明日になれば分かるわ」

「わかった・・・」

翌日・・・

俺は念のため、クロロホルムを装備し、部屋を出て、新宿駅に向かった。

新宿駅で待っていると、そこに神崎がやって来た。

「早いわね。まあいいわ、ついて来て」

アリアはそう言った。

俺は神崎の後をついて行く。

しばらくして、新宿警察署に到着した。

「ここになんの用があるんだ？」

「ついてくればわかるわ。それより・・・、隠れてないで出てきなさい！」

誰か尾行してたのか！？

俺は慌てて振り向く。

そこには、遠山が立っていた……。

なんでお前が居るんだ……。

「気づいてたんなら言えよ……」

遠山はそう神崎に言った。

「迷ってたの……。アンタも武偵殺しの被害者だから……」

「ならどうしてそいつは直で連れて着てんだよ？」

「薫はこの件で、ある仮説をあたしに教えてくれたわ。その仮説が本当なら、薫は完全に被害者よ」

「仮説？なんだよそれ……」

「武偵なら自分で考えなさい」

神崎はそう言って、警察署に向かって歩き始めた。

俺も神崎に続いて歩き始めた。

遠山もついてくる。

そして、面会室に入る。

「神崎、今から誰に会った？」

しかし、神崎は答えなかった。

「遠山、お前は神崎の横に座れ」

俺は遠山に近づき、耳元でそう言った。

「なんでだよ？」

「こんな時、俺はどんな対応をすればいいか分からん・・・」

「俺だって苦手だったの・・・」

遠山はそういつつも、神崎の横に座った。

俺は壁にもたれかかる形で立った。

しばらく待っていると、まだ20代前半ぐらいの女性がアクリル板の向こうの部屋に連れられてきた。

「ママ！」

俺は神崎の言った言葉に度肝を抜かれた。

遠山も驚いた様子だ・・・。

「あらあら、男の子を二人を連れてくるなんて・・・、どちらが彼氏さん？」

「か、彼氏なんかじゃないわよ！こいつは遠山キンジ、あっちに立

つてるのは姫神薫……。どっちも武
偵殺しの被害者よ」

「そう……。はじめまして、神崎かなえといいます。ちょっと危
なっかしいけど、仲良くしてあげて」

「な、何言ってるのよ！それより本題に入るわ。実は薫が起てた仮
説には、薬専高の生徒も狙われている
んじゃないっかって考えているの。だから、その線も考慮して調べ
て行けば犯人に行きあたると思うわ」

「アリア、それはあくまでも仮説でしょ？暗中模索の状態で動いて、
アリアが危険な目に遭うかもしれないわ
いわ」

「でもママの冤罪を晴らすには……」

「神崎、時間だ」

監視がそう言っで、かなえさんの腕を掴み連れて行こうとする。

「止める！！ママに乱暴するな！！放せ！！」

「アリア！今のあなたではイウーに勝てないわ！まずはパートナー
を見つけなさい！曾お爺様にも優秀なパ
ートナーが居たわ！アリアも信頼できるパートナーを見つけなさい
！」

かなえさんはそう言い残して、連れて行かれた。

面会時間・・・3分49秒・・・。

重犯者の面会可能時間だ・・・。

そんなに悪いことをしたようには見えなかったが・・・。

確か神崎は冤罪って・・・。

神崎はその場から立てなさそうなくらいに項垂れていた。

「許さない・・・。あんな扱いをしていいわけない・・・。」

神崎はそう呟いた。

「帰ろう。こんなところに居たってなにも始まらない・・・。」

俺はそういつて、ドアを開けて外に出た。

すると、受付に俺の知っている刑事が居た。

公安0課の沖田総司・・・。

ちなみに公安0課とは、＜殺しのライセンス＞を持つ刑事で、彼らには人を殺める権限がある。

俺は沖田さんと目があつた。

「あ、姫神君。こんなところでなにをしているんだい？」

「ちょっと用事がありまして・・・。」

「まさか悪いことしたわけじゃないよね？」

そう問いかけてきた沖田さんの目は、殺気に満ち溢れていた。

「そんなことしませんって！てかしたら即あなた方の標的になるじゃないですか！！」

「当たり前だよ。なんせ薬専高生は下手したら殺人者になりかねないからね」

「そ、それより沖田さんはどうしたんですか？」

俺がそう問いかけると、沖田さんは周りを気にしている様に困った。

「ここじゃ話せないんですね」

「まあね。これは私達にとっても失態だからね」

「そうですか……、詳しいことは探りませんが、お氣をつけて」

「そうするよ。それじゃあ、またね」

沖田さんはそう言って、警察署を出て行った。

沖田さん達が自ら失態と言っている山って一体何なんだ？

しかし、深く探ると逆に殺されるから止そう……………。

俺がそう思いつつ、外に出ると、雨が降っていた。

「来る時は晴れてたのにな……」

すると、神崎は雨の中歩いて行ってしまう。

遠山は神崎の後について行く。

仕方ねえか……。

俺も二人の後をついて行く。

雨の中、人通りは少ない。

もうすでにずぶ濡れだ……。

「神崎、お前が警察の奴らを訴えたい気持ちは分かる。でもな、お前がそう言ったところで無罪にならねえぞ」

俺がそういうと、神崎は立ち止った。

「アンタに何が分かるのよ……？あたしの気も知らないで知ったようなこと言わないで！」

俺は神崎の言ったことに苛立ちを感じた。

「……わかった。もうお前に関わらない」

俺はそう言って、その場を去った。

この状態でタクシーに乗ることも、バスに乗ることも、地下鉄に乗ることも、モノレールにも乗れない
だろ・・・。

仕方ない・・・。

歩いて帰ろう・・・。

俺は歩いて寮まで帰った。

翌日、俺は部屋に居た。

昨日のことで神崎に会うのが嫌だったからだ。

俺はベッドに寝転び、目を閉じる。

すると、携帯にメールが届いた。

俺は携帯を手に取り、メールを開く。

知らないアドレスだが、題名に遠山と書いていたのですぐに分かった。

<昨日のあれは言い過ぎだぞ。ちゃんと謝った方がいい。それから、
アリアは今日、ロンドンに帰るらしい>

と書いてあっただけだ。

謝るのは嫌だからその部分だけは無視しておく。

が、少し気になったのが、最後の文……。

神崎がロンドンに帰るという文……。

「俺にどう関係あんだよ……」

俺は返信もしないで携帯を閉じ、眠りについた。

プルルル……プルルル……と携帯が鳴る。

今回はメールじゃない……。

俺は寝ぼけながら電話に出た。

「はい？もしもし」

『姫神薫、君は大切な仲間を失うことになる』

そついった相手は、変声機を使っていた。

明らかに怪しい……。

それに大切な仲間って……？

「どういう意味だ？」

『そのままの意味だ。神崎・H・アリアをチャーター機ごと消し去る』

一瞬、その意味が全く呑み込めなかった……。

神崎を殺す？

コイツは一体何を言っているんだ？

「もし仮にそれが本当なら、何故俺が関係する？」

『今回は君も関わり深い者が犯人だ』

「どういうことだ！？答えろ！」

『すべてを知りたかったら午後6時47分発のロンドン行き、チャーター機AM A600便に乗るといい。

君の出番も用意してある』

「意味がわかんねえよ！！大体お前は・・・！」

俺が問いかけようとした時、電話が切れた。

「くそッ！」

俺は時計を見る。

時刻は夕方5時半・・・。

今から行けば余裕で到着する。

「行くしかねえか・・・」

俺はそう呟き、クローゼットに収納していた布に包まれたモノを2つ取り出す。

布を解き、それを手に取る。

それはリボルバーと呼ばれる銃・・・。

S & a m p ; W M 5 0 0 （8インチモデル）とS & a m p ; W M 6 8 6（4インチモデル）である・・・。

「中学以来だな・・・」

俺は武偵高制服に着替え、懐に付けたホルスターにM 6 8 6を装備し、腰に付けたホルスターにM 5 0 0を装備した。

どちらも・500S&Wを装填してある。

「よし……行くか」

俺はタクシーを呼び、空港に向かった。

空港に到着し、俺はA M Aのカウンターに向かった。

やはりチャーター機に乗る為にはチケットが必要だろう。

「すいません、A M A 6 0 0 便の空席はありますか？」

「少々お待ちください」

受付嬢はそう言って、調べ始めた。

「残念ながら、空席はございません」

おいおいウソだろ……。

空席が無いんじゃ入れねえじゃねえか！

俺は少しいららし始めた。

しかし、あの時、相手が言っていた……。

<君の出番も用意してある>と……。

もしかしたら……。

「それでは、姫神薫の名で予約はしていませんか？」

受付が調べた。

「ええ、ございますよ」

やっぱりか……。

「実は私、こういうものです」

と俺はブレザーの胸ポケットから武偵高生徒手帳を取り出し見せる。

「あなたが姫神様でございますか？それでしたら、こちらを……」

受付はチケットを取り出し、渡してきた。

「昨日、直接ご予約を頂いていましたので、予約しに来た方が姫神様かと思っていましたが……、代理でいらしたんですね」

代理……、恐らく電話の相手だろう……。

「まあそんなところです」

「それでは、ごゆっくりとお寛ぎ下さい」

受付は軽く会釈をした。

俺は搭乗口に向かい、機内に乗り込んだ。

俺の部屋はF-?号室である。

中に入ると、テーブルに赤ワインが置いてあり、俺宛の手紙も添えられていた。

その手紙を開いてみる。

<ようこそ、姫神君。ここでは本気を出さないと殺られるから気を付けたまえ>

とだけ書かれていた。

なんで俺の本気を知ってんだ・・・!?

コイツ・・・俺のこと調べてやがる・・・。

すると、機内放送が流れ、俺は座席に座り、シートベルトをつける。

夕方6時49分、機体は離陸した。

シートベルトサインが消え、俺はテーブルに武装をすべて並べる。

右からM500、M686、.500S&W弾×60発、
バタフライナイフ、防弾グローブ・・・。

俺は防弾グローブを装着し、M500とM686をホルスターに戻

し、弾をリボルセットというリボルバー専用のリローダーに5発と6発を腰のリローダーホルスターに容れる。

後はこの機体が、何もなく目的地に到着することを祈るだけだ。

しかし、離陸してすぐに、積雷雲の近くを飛んでいた。

<ただ今、積雷雲の側を飛行中です。多少揺れますが、飛行に影響はございません>

という放送が流れた。

この機体を操縦してる飛行士は、下手だな……。

すると、銃声が鳴り響く。

それもマグナム弾を放った時と同じ音が……。

行くか……。

俺はM686を装備して、ドアをゆっくりと開ける。

そこには、先に出ていた遠山と神崎が、乗務員に銃を向けていた。

「Attention please でやがります」

乗務員はそう言って、催涙弾の様なモノを取り出し、投げた。

客は部屋に逃げ込む。

しかし・・・これはダミーだ！

俺は銃を構え、乗務員にめがけて撃った。

しかし、数ミリのところで外れた。

「チツ！逃がしたか・・・」

俺は歩いて、神崎と遠山が逃げ入った部屋をノックし、開ける。

すると、遠山が銃を構えてこっちに睨みを利かせてきた。

「待て、俺だ」

「姫神！！なんでお前が・・・？」

「ちよいとあいつに用があつてな」

俺はそう言って、神崎に視線を移す。

しかし、神崎は目を反らした。

「遠山、ついて来い。この機体に爆弾が仕掛けてある」

俺がそういうと、遠山と神崎は驚いた表情をする。

「どういうことだ！？爆弾って・・・」

「実は俺の携帯に電話があつて、この機体ごと神崎を消し去ると言っていた。恐らく、爆弾で爆破するってことだろう。ところで、お前は どうしてここに居る？」

「この際だから、お前にも教えておく。実は去年の武偵殺しは、バイクジャック、カージャック、シージャックという順に、標的が小さいものから大きいものへと変わっている。が、ここで一度、標的は小さくなる。チャリジャック、バスジャック・・・そしてこのハイジャック・・・。だが、去年のシージャックでは一人の武偵が殺された・・・。バイクジャックでも、カージャックでも被害者は居なかったのに・・・。そして、流れが一緒なら・・・。」

「ハイジャックで一人狙われる・・・ということか」

俺がそう続けると、遠山は頷いた。

「その標的がアリアだ」

それはどうか・・・？

すると和文モールス信号の音が流れた。

<オイデ オイデ イウー ハ テンゴクダヨ オイデ オイデ
ワタシハ イツカイノ バー 二
イルヨ>

「誘ってやがる・・・。」

「行くしかないでしょ」

神崎は立ち上がり、白銀と漆黒のガバメントを取り出した。

俺はM686を構えながら外に出た。

そして、一階のバーに向かう。

「薫、なんでアンタがここに来たの・・・？下手したらアンタまで死ぬのよ・・・」

神崎は俯いた表情で問いかけてきた。

「電話の相手にムカついた・・・。それに、俺と関わり深い奴が犯人らしい。そう言われちゃ、黙っておけなくてな」

「そう・・・」

神崎はそう言って黙った。

そして、バーにたどり着くと、客室乗務員がカウンター席に座っていた。

「今回もまんまと引っ掛かってくれやがりましたね」

そういつて、乗務員は立ち上がった。

俺は乗務員に銃口を向ける。

「動くな。動いたら撃つ！」

「出来るもんならやって見やがれです!!」

乗務員がそう言った瞬間、背後に気配を感じた為振り向くと、仮面をした男が日本刀を振り上げていた。

俺はM686で受け止める。

「相変わらずだな・・・、薫は!!」

男はそう言つて、さらに力を込めてくる。

この力・・・、昔経験がある・・・。

「姫野・・・なのか・・・？」

俺がそう問いかけると、男は乗務員のところまで宙返りをした。

「久しぶりだな、薫。元気そうじゃないか」

「姫野!!どうしてお前がこんなことをする!?!」

俺は感情的になっているのかもしれない・・・。

だが、感情を抑えることができないのだ・・・。

「薰、あいつのこと知ってるの!？」

「あいつは姫野 愁^{しゅう}……。元青森武偵中ランクSの武偵だった奴だ……」

「ノンノン、彼は今もランクSの実力だよ、姫神君」

乗務員はそう言って、マスクを外した。

もちろん、姫野も仮面を取った。

「理子!!」

神崎と遠山は驚いている。

「どうしてお前達が……」

俺がそう問いかけると、姫野はニヤリと笑った。

「それが、もう一人いるんだよね、これが……」

「もう一人……だと!？」

「それっじゃあ登場してもらいましょー!元爆弾魔こと矢橋 洸^{こう}」
「!」

俺はその名を聞いて驚いた……。

すると後ろから、黒いコートを着た少年が、俺の横を不気味に通り過ぎ、理子達のところに立った。

「わざわざ紹介するな・・・、リュパン」

「その名で呼ぶんじゃないよ、洸」

峰は男の様な口調となった。

俺より驚いたのが、矢橋が居ることだ・・・。

歴史上、最も残忍で、邪悪な爆弾魔である矢橋が居ることが・・・。
。。

4弾 Despair（後書き）

姫野 愁（ひめの しゅう）（17）

髪：濃い藍色でエル・ワトソンのような髪型

眼色：ダークブルー

身長170cm

愛用の武器は日本刀で、銃はコルト キングコブラを使用。

矢橋 洸（やばし こう）（15）

髪型：漆黒で武藤の様な髪形

眼色：ブラウン

身長：157cm

武装こそしていないが、爆弾を作る為の装備は整っている。

5弾 An armed a public prosecutor

何故だ………！？

コイツは終身刑で服役しているはず…。

なのに何で俺の前に矢橋が立ってんだ…！？

俺は今の状況を理解できなかった。

「その顔だと、なぜお前がココにいるんだ…と言いたそうだな。なら教えてやる…。この二人が逃がしにくれたからだ」

俺は矢橋が言った言葉に驚いた。

「そんなのありえない…。第一！あの監獄を逃げられるはずがないだろ…！」

俺はそう怒鳴りつけた。

「落ち着きなさい！これはアンタを動揺させるためよ！」

神崎が言うことが正しい…。

俺はいったん深呼吸をして、気を落ち着かせる。

「薫、昔こういう話をしたよな？もしお互いどちらかが牢獄に入った時、どうやって助け出すか…。」

って」

「まさかお前……、監獄あそこに居た奴らを全員……」

「殺したよ。みじんに切り刻んでな」

チツ……やっぱりか……。

「理子、ここはお前に任せる。俺と愁は先にイウーに戻っておく」

「りょうかゝい！ まっかせなさい！」

そつ峰が言つと、矢橋と姫野はバーの裏口に入つて行く。

「待て！」

俺はそう叫び、銃を放った。

しかし、姫野の刀によつて碎かれた。

「言つただろ？ 薫。剣は銃よりも強し……。お前は俺に勝てないんだよ」

姫野はそう言つて、裏口の中へと消えた……。

「チツ……、遠山、神崎。俺は爆弾を探してくる。峰のことは任せた」

「わかつたわ。だから、何があつてもアンタは爆弾をどうにかしなさい！ アンタは理子とは関係ないんだから。もし割り込んできたら

風穴！」

神崎はガバを取り出しながら俺に言ってきた。

「・・・分かった」

俺はそう言って、バーを出て、貨物室に向かう。

もし、矢橋が機体ごと爆破するということは、それほどデカイ爆薬を使うということだ・・・。

となると、貨物しかねえだろ・・・。

俺はそう思い、急いだ。

しばらく走って、やっと着いた。

そして、＜非常貨物入口＞と書かれているドアを薬専高で習ったアンロックスキルで開ける。

中に入り、まず目の前に見えたのは、大量の＜KEEP OUT＞と＜DANGER＞と書かれたテープが張られたドデカイ箱がある。

「これじゃあ核爆弾と同じ威力になっちまうぞ・・・。」

俺は箱に近付き、中に入っているモノを調べる。

この箱は、薬連直属の薬品会社の箱で、薬品名は必須記載事項だ。
そしてやっと見つけた。

<nitroglycerin 5kl>と書かれていた。

おいおい……マジかよ……。

こんなもんが乗ってたら確実にこの機体は薬物運搬法で第三種貨物
飛行免許が必要だ……。

もし、このことを知らないでパイロットが操縦してんなら……。

俺は急いで、起爆装置かタイマーを探した。

そこには衝撃起爆装置ショックスイッチが着けられていた。

が、これは衝撃が無い限り起爆しない。

俺はそのことを知らせるために、急いでコクピットに向かった。

てか、ここからコクピットまでほぼ機体を縦断するじゃねえか！

俺はそう心の中で叫びながら走った。

その途中、バーに向かう通路から何発もの銃声が聞えた。

俺の体は、バーに向いた。

しかし、途中で立ち止まる。

<割り込んできたら風穴！>という神崎の言葉が脳裏に浮かんた。

俺は振り返り、コクピットに向かった。

そして、たどり着き、ドアをたたく。

「すいません！！この機体にニトログリセリンという爆発液が載っています！すぐに開けてください！」

俺がそう叫ぶが、誰も返事をしない。

まさか・・・

俺はM686を構えて、ドアノブを回し、押す。

しかし、ドアはビクともしない。

まるで溶接しているかのような・・・。

まさか、ヒーティングボムを使いやがったな・・・。

ヒーティングボムとは、爆発をせずに高熱を発する爆弾で、最高温度になると、鉄を溶かすほどである。

作り方によって時間は様々に発動する。

俺はドアノブ目掛け、銃を放った。

しかし、一発では微動だにしなかった。

しかたない……、六連射するか……。
ファンシヨット

俺は弾をリロードして、一点に構え、放つ。

ドアはノブ一点に6発全弾でドデカイ穴をあけた。

そして、ドアを蹴破った。

その瞬間、機体が揺れ、俺は体勢を崩し片膝をつく。

さっきの揺れぐらいなら二トロも反応しないだろ……。

それよりパイロットは……。

俺は操縦席に向かい、覗く。

しかし……誰も居なかった……。

つまり……この機体にパイロットが存在していない……。

俺は計器類の上に何やら機械の様なものがあつたため調べる。

それは、遠隔飛行システム……通称RFS……。
リモート・フライ・システム

まずはこれを取り外さなければ、こっちでそう出来ねえし……。

俺はそう考え、機器を銃で撃ち、取り外した。

さてと、自動操縦にしてと……。

しかし、自動操縦ができなかった。

ぶっ壊されている……。

仕方ないか……。

俺は渋々操縦桿を握る。

すると、無線が入る。

ガガァー

『こちら羽田コントロール、600便応答願う。こちら羽田コントロール、600便応答願う』

俺は側にあつたインカムをつける。

「こちら600便」

『一体東京湾上空を旋回し、何をしている？』

「今、機内で武偵2名と……」

俺が状況説明をしていると、ドアがいきなり開く。

「神崎！お前何しに……。てかその怪我大丈夫なのか!？」

「あたしは大丈夫！アンタこそ爆弾はどうなったのよ！？」

「ショックボム衝撃爆弾……。タイマーや遠隔起爆装置が無かったところからして間違いない……。恐らく、着陸時の衝撃でドカンだろ……」

「どうすんのよ！？それだつたら着陸出来ないじゃない！」

「だから今、策を考えてんだろ……」

『600便、爆弾とはどういうことだ！？』

「武偵殺しの仕掛けた奴だ。タイマーや遠隔起爆装置が無いのが唯一の救いだな……」

『ならば海に進路を変えて海上で……』

「そんなんじゃ、こっちに乗っている一般市民はどうなる？アンタらはそいつらを見捨てる気か？」

『背に腹は代えられん……』

俺は羽田コントロールの奴の言葉にイラッときた。

「わかった……。お前らみたいな下衆の居るようなところはもう着陸しない……」

俺はそう言い残して、インカムの電源を切った。

「どうしたの？」

「羽田Cの見解じゃ、俺達の死が望みみたいだ」

「どういうことよ!？」

「つまり・・・、大勢の人がいる空港で爆発するより、上空で爆発してほしいそうだ」

羽田にイラツと来たので、捏造しておく。

「日本の空港って最低ね・・・。これからどうするの?」

「薬連に連絡を取って・・・」

すると、爆発音と振動が来た後、異常を知らせる警報音が鳴る。

「どうしたの!？」

「分からねえが・・・機体側2基のエンジンがlost power
って表示されてやがる・・・。とにかく一度、高度を上げる」

しばらくして、キンジがやって来た。

「遠山、峰はどうした?」

「逃げられたよ・・・。それより、お前一人で操縦してんのか?」

なんだか・・・いつもの遠山じゃないみたいに聞こえる・・・。

気のせいか・・・

「まあな・・・。遠山、そっちの席に座ってくれ」

「べつにいいが・・・、操縦の仕方わかねえぞ」

「別にかまわないさ。ちょっとした条件合わせ・・・」

俺はポケットから携帯を取り出し、愛美に電話をかける。

『もしもし？薫。珍しいね、薫から電話してくるなんて・・・』

「そうか？まあいつも会ってるしな」

『そうだね』

「世間話はまた帰ってからということで、愛美、お前の姉と話してきるか？」

『え？う、うん。多分薬連空港に居ると思う。だけどどうして？』

「滑走路を貸してもらおうかなって思ってたな」

『・・・また危ないことに首突っ込んでるんだね・・・』

「・・・ああ」

『わかった。姉さんに連絡して、薫の携帯に連絡してもらおうように言っとく』

「悪いな・・・」

『その代わり、無事に帰ってきたら何か奢ってね』

「わかった」

そして、愛美との通話を切った・・・。

「神崎、ちょっと来い」

「なによ？」

神崎は俺に歩み寄って来た。

俺は懷から隠し持っていたクロロホルムを染み込ませていたガーゼを取り出し、神崎の口と鼻を塞いだ。

「な・・・んで・・・」

神崎はそう呟いて気を失った。

「薰、お前何をした？」

「ただ眠らただけだ。この傷、峰理子に斬られたんだろ？」

「ああ。だが傷は浅い。そんなに警戒するようなものじゃないだろ」

「まあ確かにそうだ。けどよ、神崎って頑固だろ？病院に行けって言っても言うこと聞きそうにないから

な・・・。だから眠らせておかないと連れていけないだろ。この傷

がどうであれ、病院で正確な検査を

してもらねえと、後であいつみたいになつたら困る・・・」

「あいつ？」

「あ、すまない・・・。お前達の知らない奴さ。とにかく、着地地点は薬連の輸送滑走路だ」

「ここからどのくらいかかる？」

「おおよそ10分・・・。ま、外側さえ無事なら大丈夫だろう。一応念のために、この機体に詳しい奴から聞いてくれ」

「わかった。こういう時は武藤が一番詳しい」

武藤ってあの大男か・・・。

しかし・・・こんな大型機体なんて半年ぶりだ・・・。

校長の好意で第三種貨物飛行免許を取ったが・・・、こんな時に役立つとは・・・。

すると、俺の携帯が鳴る。

非通知だが、恐らくあの人だ。

「もしもし、凜姉さん？」

『よゝ薫。愛美から言われてびっくりしたぞ。で、何の事件に巻

き込まれたんだ?』

「巻き込まれたというか、自分から行ったというか……。まあそんなところ」

『訳が分からないが……。私たちは何をすればいい?』

「滑走路を貸してくれ。できれば本路メインをな」

『無茶言っね、本路メインは危険物積載のみ解放するようになってる。旅客機なんかは許可が下

りるわけが無いだろ。許可が下りるとしたら、副路サブだ』

「この機体には二トロが載ってんだ!そんなノーマル着陸仕様の副路サブじゃ爆発すつだろ!」

『それを先に言え!!滑走路のことは何とかしておく!できればあと20分待ってくれ!そうすれば何とかなる!』

「20分か……。もつと思うが……」

「無理だ、薰」

そう言ったのは遠山であった。

「なんで無理なんだ?」

「燃料が漏れている。武藤が言うにはあともって10分が限界だそうだ」

「たったそれだけか!？」

『どうした?』

「それが、この機体の飛行可能時間が10分もないらしい・・・」

『それだけじゃ許可が下りるかわからないぞ・・・。まあとにかくやってみる・・・。お前はこっちまで来ておけ。用意ができたらずくに始めるぞ』

「了解」

そして、無線が途切れた。

「遠山、あっちに着いたら神崎と病院に行ってくれ。恐らく俺は警察に事情を聞かれるかもしれん」

「わかった」

しばらく飛行して、薬連日本支部の空港上空に到着した。

ザザア・・・

『薫、今さっき防衛省から電通が来た』

「なんだって?」

『全空港の滑走路は着陸不可だそうだ……。ま、薬連^{こじ}専用空港は国なんぞに仕切られないかな』

「だから選んだんだよ……。それで着陸許可はどうだった？」

『脅したら簡単にくれた』

脅したのか……。恐ろしい……

「ならあと何分で着陸準備が整う？」

『もうできてるよ。タイミングは美春に任せる』

美春……。か……

『こちら滑走路監視塔の美春。600便、応答願います』

「600便、聞えている」

俺がそういうと、5秒ほど美春は黙った。

『貴方には死んでいただきたい……。ですが、貴方以外の方は無関係……。無事に着陸できるように尽力します』

「……。わかった」

『機体を滑走路に向けてください』

俺は言われるまま操作する。

『機体を降下させてください。そのまま、機体前部を浮き上がらせて下さい。その後、後輪を下して、着地させてください』

おいおい……このままじゃノーマルじゃねえか！

「おい！二トロが載ってるって聞いていないのか！？」

『チツ……。それを先に言ってください』

「今お前舌打ちしただろ！！まあいい！また一からやり直した」

俺はもう一度、高度を上げて、もとの位置に戻った。

『それでは、車輪を全輪同時に下を並走しているマウントカーに載せてください。ただそれだけです』

「カメラだけじゃ見えないところもある！」

『……。そのまま高度を下げれば丁度です』

やってみるか……。

俺は一か八か、機体を下した。

すると、なんとかマウントカーの上に着陸出来たみたいだ……。

俺は急いで、エンジンを逆回転させる。

マウントカーでもブレーキがかかる仕組みだ・・・。

そしてやつとの思いで停まった・・・。

その後、すぐに薬連の救急車が到着し、神崎と遠山を乗せて武偵病院に向かった。

俺はその場に残った。

ここならマスコミすら来ない。

いいや、正確には来れないのだ。

部外者は立ち入り禁止だからな・・・。

乗客もバスですぐに外に追いやられた。

俺は薬連に加盟しているため追いやられはしない。

俺が着陸した機体を見ると、凜姉さんと美春が来た。

「おつつ薰。無事に着陸できたな」

「さすが凜姉さんの部下だな。すぐに合わせてくれて助かった」

「そんな技術あるわけないだろ・・・。お前が勝手に合わせたんだ」

「は？んなわけあるか・・・。無理に決まっているだろ」

「いいえ、確かに貴方は自分で合わせました。恐らく感覚的に合わせただだと思います」

あり得ない……。

あの短時間で俺は何をしたっていうんだ……？

「分からない……何をしたのか……」

「フッ、お前らしいな。じゃあまた何かあったら電話くれ」

と言って、凜姉さんは去って行った。

美春もついて行こうと振り返った。

「美春……」

と俺が呼ぶと、振り向いた。

「薫さん、今回は運良く生き残ることができましたが……」

美春はそついうと懷から銃を取り出し、俺に銃口を向けてきた。

「いつかきつと、私のコルトが貴方の命を奪います。その時が来るまで、死んではいけませんよ」

そついつて、美春はコルト キングコブラを懷になおし、立ち去った。

つまり、死ぬなっでことか……。遠回しに言いやがって……。
かわいくねえな……

俺は薬連の空港から寮に戻った……。。

寮にたどり着くと、何やら箱が置いてあった。

箱にはく青森産つがるリンゴと書かれていた。

差出人を見ると、母さんからだ。

俺は箱を持って、部屋に入る。

そして開けると、真っ赤なリンゴがきれいに並べられていた。

丁度いい、これを手土産に神崎のところに行くか……。

俺は果物ナイフと林檎を4玉を袋に入れて、武偵病院に向かった。

病院にたどり着き、受付で聞いた部屋に向かった。

そして神崎の居る部屋にたどり着き、ノックする。

「入っていいわよ」

と返事がしたため、中に入る。

「よゝ神崎、元気にしてるか？」

「なんで入院しているのか聞きたいくらいに元気よ」

「そうかそうか、ならいいさ。それより遠山は？」

「キンジなら買い物に行つたわ」

「入れ違いかよ……。まあいいか……」

「それより、アンタなんで来たの？」

「見舞いだよ……」

俺がそういうと、神崎は持つて来た林檎をジューツと見ている。

「林檎、食つか？」

俺が問いかけると、首を縦に何度も降る。

俺は近くの椅子に座り、林檎の入った袋を机に置き、果物ナイフと林檎1玉取り出し、6等分に切る。

「そついえばアンタ、あたしに何か吸わせたわよね？」

「・・・・クロホルム」

「なんでそんなモノを常備してんのよ!？」

「いざって時に使っただよ・・・・。それより、検査結果はどうだった？」

「異常なしよ。ここに入院してる場合じゃないってのに・・・・」

「死んだら元も子もないだろ・・・・」

俺がそういうと、神崎は黙った。

俺は少し遊び心で、林檎を兎の形にして、差し出す。

「食べる」

「毒・・・・入ってないわよね？」

神崎は警戒する。

「警戒しなくても、大丈夫だ」

神崎は恐る恐る、食べる。

「神崎、お前には教えておいた方がいいだろう・・・・、矢橋と姫野のこと・・・・」

「そう来ると思ったわ・・・・。アンタ、薬物だけを扱っていた様には思えないわ・・・・」

こいつには話しておかないといけないな……。

「……俺は中学時代、青森武偵中強襲科で姫野と組んでいた。互いに信頼し、背中を任せられるほど

だった。が、俺が高校に上がるとき、薬専高から俺が進路を決めた時、あいつも武偵を辞めた……。それから、噂でしか聞いたことが無いんだが……、あいつはどこかの組織に入ったと聞いていた……」

「それがイウーだったってことね」

「そうだ……。そして矢橋……。あいつは去年、俺が捕まえた爆弾魔だ……」

「爆弾魔!？」

神崎は驚いた表情をした。

「ああ。奴が起こしてきた爆破事件は世界で4000件……。すべてがプラスチック爆弾だ。被害は

4000件中全件最低3名は死者が出ている……。あいつは悪魔だ……。俺の仲間も300人ほど殺され

た……。先輩も……。教師も……。同僚も……。全員無残な死にざまだった……。俺は公安0課と武装検事と協力して、去年の末、やっと捕まえた……。そして、公安0課300名……。武装検事200名が見守る中、あいつは終身刑に処され、離島監獄に囚役された……」

「公安0課と武装検事がそんなに……」

「世界中の公安0課と武装検事が動いたからな……。だから、奴を逃がしたってことは、峰も姫野も死刑確定だ……。このことがバレたら、日本の公安0課と武装検事は世界から批判されるだろうな……」

俺はそういいつつ、林檎をもう一つ取り出し、切る。

「じゃあどうするの？」

「どっちも捕まえるさ……。姫野と矢橋はこの俺が……」

切った林檎を神崎に渡す。

「アンタ一人で出来るのかしら？」

「これでも元強襲科ランクSだ。やるときはやるさ……。そんな時は協力してくれ……」

「いいわよ」

神崎はそういいつつ、手を差し伸べてきた。

まだ食う気がよ……。

俺はもうひとつ、林檎を切った……。

翌日、神崎も退院し、普通の生活となった。

一般教科が終わり、俺は屋上で空を眺めていた。

「姫野と矢橋・・・、あいつ等はどうやって知り合ったんだ・・・？」

あいつらの接点は無いはず・・・。

もし、あるとしたら俺だな・・・。

俺がそんなことを考えていると、携帯が鳴った。

「はい、もしもし・・・」

『俺だ』

「土方さん、例の件ですか？」

『例の件って・・・、沖田から何を聞いた？』

「これといって詳しいことは聞いてないですよ。でも雰囲気では何かあったのか分かります・・・。逃げられたんですね？矢橋 洸に・・・」

『ハア・・・、やっぱり感じてやがったか・・・。ああ、一か月前に監視全員、肉片と化していた・・・。』

今、その調査中だ。それでお前に話が聞きたいんだが・・・、今から近藤さんとそっちに行つていいか？』

「事前に武偵高に連絡してくだされば、恐らく大丈夫かと」

『わかった。そっちに着いたらまた電話する』

そう言つて、土方さんは電話を切つた。

土方さんは公安0課の？2である。

近藤さん、土方さん、沖田さんと知り合つたのは、去年の矢橋が起こした爆弾事件関係で俺が爆弾解体に出動した時だ。

あの時も先輩が・・・。

ハッ！いかんいかん・・・。

忘れたい過去だ・・・。

俺はその場を立ち去つた・・・。

1時間後・・・

俺は放送で呼ばれ、マスターズ教務科学科塔にある会議室に、近藤さんと土方さんと共に居た。

「単刀直入に聞くが、お前はなにか奴の情報を知らないか？」

「知ってますよ、土方さん」

「本当か！？どんな情報だ！？」

「奴が加担している組織について……」

俺がそういうと、土方さんは眼の色を変えた。

「どういうことだ……？ 奴にはバックがいるってことなのか……？」

「ええ。確か……イウーっていう組織らしいです」

俺がそういうと、土方は黙りこんだ。

「やっぱり、手出しできない組織ですか？」

「……まあな。奴がイウーに入ったのは、俺達0課と武検から逃げるためと考えて間違いはないと思う……」

「なら、俺があいつを殺りますよ……。この手で……」

「お前、ふざけてんのか？ お前はただの武偵になり下がったんだぞ。まだお前が薬専高の生徒なら考えられたが、今のお前じゃ……」

「殺らせるよ……あの塵蟲を……」

俺は殺気を放ち、土方を睨む。

「ハア……、近藤さんの言った通りになりやがった……」

「言っただろ？コイツはあの姫神検事のお孫さんだ。正義感が強い」

「祖母は関係ないでしょ……。それより、どうなんですか？」

俺がそう近藤さんに問いかけると、近藤さんはスーツの懷からホルスターに入った自動拳銃（オートマチック）最強の銃……。

デザートイーグル・50A Eを取り出し、机に置いた。

「これは？」

「姫神検事が、いざとなったらお前に渡せと言われていてな。お前なら言いだすと思っていた」

俺は机のD Eを取り、懷のシヨルダにD Eを取り付けた。

「オートマは苦手なんですがね……」

「仕方ないだろ。俺は姫神検事にお前に渡してくれって言われたから渡したただけだ」

祖母が自動拳銃を送って来たってことは、<気をつける>ということだろう……。

「あと一つ聞きたい、薫。沖田に聞いた話だが、あの監獄に服役していた矢橋以外の囚人、それに監視が何者かに殺されていた……。その件で心当たりはあるのか？」

俺は土方さんの問いかけに答えたくはなかった……。

「それはわかりません……」

「本当に知らないのか？監視カメラには仮面をした男が居た……。もしかしたらお前の知り……」

「知らないって言っているでしょ！！もう用が済んだんなら帰ってください！！私は忙しい！」

俺は自分でもなぜ怒鳴ったのか分からなかった……。

「悪かったな、薫。でも、もし何か分かったら……。もし落ち着いて話せるようになったら……。自分の足で来てくれ……。あと、矢橋洸の脱獄に加担した奴も、殺つてもかまわないからな……」

そう言つて、近藤さんは立ち上がり、土方さんを連れて会議室を出て行った。

俺は一息ついて、メデイシン薬物科の学科塔に向かった……。

姫川 凜^{りん}（年齢不詳）

髪型：黒色のセミロングのストレート

眼色：ダークブルー

身長：160cm B：B70

愛美の実の姉

姫澤 美春^{みはる}（17）

髪型：藍色のショートカット

眼色：サファイアブルー

身長：154cm B：A70

武装：コルト キングコブラ 4in

薫の幼なじみで今はライバル

6弾 Blood hand

研究室にたどり着き、武装解除をし、白衣に着替えて研究を始める。

矢橋と姫野を探すことも先決だが、これも必要だ……。

俺は天井を見上げる。

そして目を閉じた…………。

どんどん意識が遠退いて行く……。

四年前……

「右に3名居るぞ！」

俺はそう少女に叫んだ。

「了解!!」

少女は装備していたM686を構えて撃った。

そこに居た迷彩柄の奴らを倒した。

「よしや——やったよ!!」

俺は少女にM500の銃口を向ける。

そして撃った。

弾丸は、少女の横を避けて、少女の後ろに居た迷彩柄の男に当り、男は気を失った。

「感激に浸るのかまわない。だけど、注意力散漫になるのは辞めた方がいい」

「ご、ごめん・・・」

ピンポンパンポン・・・試験終了。お疲れさまでした

「恐らく、君と組むことはない」

「ええ！！貴方となら同じS & a m p ・W使いだから組めると思ってたのに」

少女は膨れる。

「残念でした。俺は・・・」

すると、試験官が現れた。

「ええっと、君が姫神君で、そっちが綾峰^{あやみね}さん？」

「あ、はい！」

少女は返事をした。

すると、試験官は俺を睨んだ。

「君が姫神君？」

「え、ええ……」

そんなに睨むな睨むな……。

「そう……。なら二人で組んでね」

その瞬間、空気が固まった……。

「今……。なんて言いました？」

「だから、姫神君と綾峰さん……。二人で組んでって言うてるの」

悪夢だ……。

「なんで……」

「君と組める相手、彼女しかないの。それに貴方達二人の相性は98%……。今までで最高のコンビよ」

なんでこんな奴と……

俺が少女を見ると、目を輝かせ、俺を見つめてくる。

「……。わかりました。組みますよ……」

「よし——あ、あたし、綾峰あやみね 澪みお！よろしくね！」

テンションが高いから嫌だったのに……。

「俺は姫神 薫……。足手纏いだけはやめてくれよ」

「まっかせなさい！」

そういつて、彼女は俺と組んだ……。

「……………はい……先輩！起きてください！」

俺はその声に目を覚ました。

「隼……か……。どうした？」

「どうしたじゃないですよ……。何眠ってるんですか……」

「悪い……考え事をしていた……。で、どうした？」

「はい。一通りサンプルは完成しました。で、もう夜の7時半なの
で帰らないと……」

「そうだな……。寮まで送ってやる」

「え！？でも・・・」

「俺のせいで遅くなったんだ。それくらいはさせてくれ」

「すみません・・・」

俺は隼を連れて薬物科寮まで送り届け、第3男子寮に帰った・・・。

寮に帰りつき、俺は着替えて眠りに着いた。

翌日、今日は朝から専門教科の日である。

といっても、^{メデイシン}薬物科だけのことだ。

薬物科は普段から危険な薬品、ウイルスを研究している。

ちなみに、扱うモノによって、研究所は変わる。

第一研究所はウイルスを研究、第二研究所は非毒薬品の研究、第三研究所は劇毒物の研究となっている。

俺は第一研究所第二研究室で＜インフルエンザウイルス＞について研究している。

朝からというのも、活動経過予測を取り、医療研究所に結果報告をしなければならぬ。

俺はPCに今まで試した薬草や薬品がインフルエンザウイルスにどのように影響するのかをまとめて、およそ50頁にも及ぶ報告書を封筒に入れ、発送した。

「さてと、すべて終わったから帰るかな・・・」

「先輩・・・、まだ朝10時ですよ・・・」

「隼、そんなこと言っただって何をしろというのだ？俺は暇で暇で死にそうだ」

「暇で死ぬような人間はいませんよ・・・」

「仕方ない、ちょっと外に出て、気分転換でもしてくるよ・・・」

「早く帰ってきてくださいね」

俺は隼の言ったことを聞き流し、念のため、武装して外に出た。

この時間帯は誰も居ない。

俺は薬物科学科塔から学園島に伸びた橋を渡り、自販機で缶コーヒ―を買って、ベンチに座った。

最近、綾峰のことが頭から離れない・・・。

何故だ？俺はあいつと組んだことがそんなによかったのか・・・？

たかが中学武偵のコンビだぞ・・・。

それに、あいつは1年であの世に逝っちまった……。

たったあんなだけの怪我で……。

俺は缶コーヒーを飲みほし、研究室に戻った……。

その日の夕方、メデイシン薬物科の授業が終わったのは、5時頃であつた。

「あゝ疲れた……。これだからメディックは辛いんだ……」

俺がそんなことを呟きながら歩いていた。

帰る途中、目の前に……。現れた……。

矢橋と姫野が……。

「久しぶりだな薫」

「姫野、矢橋……。お前から会いに来てくれるとは……。探す手間が省けたぜ……」

「ここで戦うか？それとも……」

俺は懷からM500を取り出し、構える。

「ここで戦うか……。お前を消しておかないと、後から面倒だ」

「来いよ、姫野」

「言われなくても……。やってやる!!」

姫野はそう叫んで、俺に刀で斬りかかって来た。

やはり、こいつは挑発に乗りやすい……。

俺はM500で受け止める。

「どうした？お前も綾峰のところに送ってやるのか？」

「なんでお前が綾峰のことを知ってたんだ!？」

姫野は綾峰が死んでから転入してきたはず……。

「俺がどうしてタイミング良く、お前の前に現れたか教えてあげようか？」

姫野はそういうと不気味な笑みを見せ、さっきより強い力で押してくる。

「どういっ……ことだ？」

「簡単な話さ。綾峰は……。俺が殺したんだ」

俺はその言葉に耳を疑った。

「どうして……」

「お前、薬取引があるって噂を聞いて、綾峰と現場に行っただろ？
その時に小刀にチヨイと細工をして、
軽く振っただけでポツクリ逝きやがった……。命乞いもせずに、
お前の名を何度も何度も呟きながら死んだ……。正直笑えたよ！」

こいつが……。綾峰を……。

許さない……。

「テメエ……。俺を本気で怒らせやがったな……。!!」

俺は左手でM686を取り出し、姫野の頭に突き付ける。

「貴様の一生もここまでだ！」

俺はそう叫び、M686の引き金を引いた。

姫野は頭から血が流れながら倒れた。

「こいつ……。異状か……。？」

俺は振り返り、矢橋を睨む。

矢橋は慌てて逃げ出した。

俺は懷からDEを取り出し、狙いを定め、撃った。

弾丸は矢橋の脳天を貫いた……。

矢橋はその場に倒れた……。

これで終わった……。

もう、綾峰の復讐と仲間の復讐は終わったんだ……。

俺はそういう感情の中、携帯を取り出し、0課に連絡した。

連絡してすぐに、土方さんと沖田さん、山崎さんがやってきて、死体袋に一体ずつ容れて、1ボックスカーに載せた。

「よくやった……というべきだな」

土方さんは俺の座っているベンチの隣に座って言う。

「でも私は……」

「気にしないの、薫君。君は間違っちゃいないよ」

「沖田さん……」

「そんじゃあ帰るか……。このことは口外すんなよ。あと、あのDEを渡せ」

俺は懷からDEを取り出し、渡した。

「これでお前はもう任務は完遂した。忘れる」

そう言つて、3人は歸つて行つた。

俺も急いで寮に歸り、シャワーを浴びて、眠りに着いた……。。

武偵殺し篇END

6弾 Blood hand (後書き)

綾峰 澪 (享年13)

髪型：濃い赤色のショートカット

眼色：カメラア

身長：147cm B：A60

武装：S & amp; W M686

薫の元パートナー

7弾 Recapture the past (前書き)

あけましておめでとうございます。今年もがんばって書いていきたいと思うので、応援よろしくお願いいたします。

7弾 Recapture the past

あんな事件から2週間が過ぎ、武偵殺し事件のことは落ち着きを取り戻しつつあった。

そんなことはさておき、武偵高では何やらアドシードという競技大会があるらしい。

俺には関係のないことだがな……。

俺は普通に授業を受けて、アドの説明は聞き流す。

そして説明が終わり、俺はさつさと屋上に行く。

昼休みの中で唯一休めるところだ。

が……今日は神崎が居る……。

「あの……神崎？」

「アリアふえいいわふお」

とももまんを食べながら言う。

「ならアリア、お前はなんでここに居る？チアの練習があんだろ……」

「ええ、あるわよ。でも、アンタに聞いておかないといけないことがあるのよ……」

神崎……もとい、アリアはももまんの包み紙を丸めながら言うてきた。

「何が聞きたいんだ？」

「まず、アンタが追つてた矢橋つて奴と姫野つて奴、死んだらしいんだけど、何か知らない？」

「知らねえよ……。あいつらが死んだって聞いて、俺は内心ほつとしたよ……」

「そう……。なら二つ目、アンタ、魔剣デュランダルつて知ってる？」

「ああ、あいつか……。あいつと一度会ったことがある」

俺がそう言った瞬間、アリアは急接近してきた。

「やっぱり魔剣は存在していたのね!？」

「そ、存在も何もあいつは実在する……。実際俺はアイツを見たことがあるし、
それにあいつの顔も……」

俺は魔剣の顔を思い出した瞬間、黙りこむ。

「どうしたのよ？」

「なんでもねえ!てか、さっさとお前は練習に行けよ……」

「そうね、じゃあ何かあったら連絡するわ」

そう言っアリアは歩いて、校舎入口に向かった。

だからお前は俺の携番とか知らないだろ……。

だからと言っ言わないがな……。

俺がそう思っていると、神崎は立ち止った。

「そっいえば、アンタの連絡先聞いてなかったわね」

感づくなよ!!

「そ、そうだったな……」

俺は渋々アリアに携番を教え、神崎は去って行った。

損したな……。

さてと……研究室に行くかな……。

俺はのんびりと研究所に向かった。

研究を終え、寮に帰ると、配送業のトラックが一台停まっております、

近くには俺がここに来た時、
荷物を運んだ配送員の男が立っている。

「何してんだよ？」

「お前を待つてたんだ、ガキ」

「ガキって言うな！！それより、今度は何を届けに来たんだ？」

「俺が知りてえよ……。それより、こっち来い」

男はそう言って、荷台の扉を開いた。

俺は渋々近付いて、中を覗く。

すると、何やら鼻歌が聞える。

しかも、木箱の中から…………。

「な？」

俺は瞬間的に何が入っているか、察することができた。

「ここに置いておけばいい。俺が何とかする」

「そうしてもらえれば助かる」

男は木箱を丁寧に降ろそうとしたので、「投げても構わない」と助言した。

男は乱暴にその場に投げた。

「イテッ!」

と聞えてが、無視して男はトラックに乗って出て行った。

俺は持っていたM8000で、南京錠を撃ち壊す。

「出てこいよ、綺羅^{きろ}」

俺がそういうと、現れた。

コーカサスハクギン狼……。

「イテテ……、お前、何余計なこと言ってた？もっと優しく降ろしてもらねえと馬鹿になっちまうだろ……」

「喋る狼が馬鹿なわけないだろ……。まあ、詳しいことは部屋の中で話す。ついて来い」

俺は綺羅にそう言っで、部屋に向かった。

部屋に戻り、ソファに座ると、綺羅も横に座った。

「結構綺麗にしてんだな……。おい、エロ本ないのか？」

「黙れエロ狼！」

俺はそう怒鳴って、綺羅の頭を殴った。

「イテツ！！何しやがんだ！？」

「うるせエ！！お前はそんなだから他の雌狼から惚れられないんだ！」

「それとこれとは話が違うだろ！！」

「一緒じゃボケ！！てか、お前なんで来たんだよ？」

「ん？ああ、実は星伽家からお前に、白雪をお護りしろという託を受けた。どうやら白雪は魔剣に狙われているらしい」

「魔剣に？なんで・・・」

「知るか・・・。とにかく、白雪を護ればいいんだよ。俺は常にお前の側にいる」

「つまり、学校にまでついてくるってことか・・・」

「そういうことになるな・・・。ま、俺はここで寝る。明日、白雪に会って・・・」

「あのな・・・、俺は未だに白雪に会っていないぞ」

俺がそう言うと、綺羅は愕然とした。

「ハア・・・、なんでだよ・・・。仕方ない、明日探すぞ。いいな？」

「ああ・・・。だが学校は・・・。」

「安心しろ、恐らく、連絡は言っていると思う。ちなみに俺は武偵狼としてここに暮らすからな」

「勝手にしろ・・・。」

俺はそう言った瞬間、銃声が聞えてきた。

「ここじゃ日常茶飯事なのか？」

「そうだが・・・、見に行くか・・・。」

俺は綺羅を連れて隣の部屋・・・＜遠山＞の部屋に行き、ノックをする。

すると、遠山は疲れた様子で現れた。

「よう、薫って！狼！？」

遠山は驚いた様子で後ずさる。

「ああ、こいつは・・・。」

「女みーっけ！！」

そう言つて、綺羅は部屋に飛び込んで行つた。

「おいコラ!!」

俺は急いで追いかけた。

奥に行くと、啞然とした……。

「何があつたんだ……これ……」

「俺が聞きたいよ……」

「それはそうと綺羅!!お前一体何を……」

俺が周りを見渡すと、綺羅がアリアに覆いかぶさっていた。

「つて神崎!!」

「なんなのよ!?!この馬鹿犬!!離れなさい!」

俺は綺羅の首根っこを掴み、アリアから引き離す。

「いい加減にしろよ、馬鹿狼……」

俺は殺気を放つた睨みを利かせ、綺羅を睨む。

「わかつたわかつた!!お願いだから命だけは!!」

「お、おお狼がしゃ……喋つた!!」

アリアは脅えて遠山の後ろに隠れる。

遠山でさえ、脅えている。

「その声・・・綺羅？」

俺はその声を聞いて、振り返る。

そこには巫女姿で、大和撫子を絵にかいたような少女が居た。

「おお、久しぶり、白雪」

「久しぶり！」

コイツとどこで知り合ったんだ・・・？

「おい、お前どこでこの子と出会ったんだ？」

「ハア・・・、寝ぼけんなよ薫。彼女が星伽白雪だ。お前の幼馴染のな」

「白雪・・・？大きくなったな・・・」

「胸がか？」

俺は綺羅の言ったことにイラッと来たため、脳天を殴った。

「き、綺羅！大丈夫！？」

「もう・・・ダメだ・・・」

「薰！綺羅に優しくしなきゃダメだよ！」

「知らねえよ……。コイツは昔からこんな感じだろ？」

「そうだけど……」

「それより、ここで何やってんだ？」

「え？だってそのキンちゃんの部屋だから……」

「キンちゃんって……。ここは遠山の部屋……遠山の……」

俺はぎこちない感じで、遠山の方を見る。

「今さら聞くが遠山……。お前、遠山キンジか？」

「あ、ああそうだよ」

俺はその場に崩れ落ちた。

「こ……。こんな近くに……。キンジが居たなんて……」

すると、復活した綺羅が、手ならぬ前足を俺の肩に載せる。

「灯台下暗し……。だな」

あはは……。狼に言われちゃったな……。

というわけで部屋の片づけをして、ソファにみんな座った。

「で、白雪とキンジはここに最初っからこの武偵高に居たってわけか……。」

驚きだな……。」

「俺だって、薫があんときの薫だとは思ってなかった……。」

「あはは！お前ら馬鹿なんだな」

「頼むから、綺羅は今黙っておいてくれるか……？」

「それより、何があっただよ？あんなに散らかして……。」

「わ、私は悪くないもん！！そこにいる泥棒猫が……。」

「誰が泥棒猫よ！キンジはあたしの奴隷なの！」

ドレイって……いつの時代だよ……。」

「ど、ドレイ！？ま、まさかもういけない遊びを……！？そ、そんな不健全なこと……。」

私は逆の場合は想像したことはあるけど……。」

想像してたんかい……！！

「ほお、白雪ももう大人になったものだな」

「違う意味でな……。それより、白雪は恐らく勘違いしている」

俺がそういうと、アリアとキンジは頷く。

「こいつらはパートナーとして組んでいるだけで、そんな白雪が考えている様な関係じゃない」

「そう！薫の言う通りよ！！」

「そっだぞ白雪。コイツとはただのパートナーとして組んでいるだけだ」

「な〜んだ・・・、よかった・・・」

これで解決したな・・・。

よかったよかった・・・。

「こゝいうのに限ってキスとかしてんだよな」

綺羅がそういうと、アリアとキンジが固まった。

「・・・・・・・・マジで？」

俺が二人に問いかけると、二人は違う方向に目を反らした。

「した・・・のね・・・？」

白雪はそう言って、殺気高いオーラを放った。

「落ち着け！白雪！あれは不可抗力で仕方なく・・・・」

「そ、そうよ！そ、それとダイジョブだったから……！」

何が大丈夫だったんだよ……。

「子供はできてなかったから！」

「な、何言ってるんだお前！！」

「だ、だってキスしたら子供ができるってお父様が！」

「ハア……、メディックの俺が教えてやろう……。それは小学生に教える親の騙しテクだ。」

そんなんで子供が産まれたら第2次ベビーブームが来てるっての・

・

「じゃあどうやってできるのよ！？」

俺は眼を反らす。

「お前が知るにはまだ早い……」

俺はそう呟いて、白雪の居た方を見ると、すでに白雪の姿は無かった。

「いつの間に白雪の奴帰ったんだ？」

「知らん。俺もさつき気配が消えたなと思ったたら居なかったんだ」

綺羅がそついうのなら、本当なのだろう。

仕方ない、俺は帰って寝るかな・・・。

俺はそう考え、立ち上がる。

アリアはキンジに一生懸命に性教育について問いただしている。

「じゃあキンジ、俺は部屋に戻る。頑張って教えるよ」

俺は敬礼をして、綺羅と共に部屋を出た。

途中、キンジに助けを求められたが、無視をして部屋を出た。

翌日、狼を連れてバスに乗れないので、歩いて行くことにした。

「なんでバスに乗んねえんだよ？こっから学校、結構かかんだろ？」

「お前を連れてバスに乗れるわけねえだろ。それとも何か？射殺されたいのか？」

「なんでそうなんだよ！嫌に決まってるだろ！！」

「なら歩いて行くぞ。バスには武偵がわんさか乗ってたんだ。お前の安全を考えたらこっちの方が安全だ」

「……そう言われたら何も言い返せねえじゃねえか……」

「しかし、懐かしいな……。こうやって一緒に歩くの……」

「そうだな……」

俺と綺羅はそのあとお互いに黙り込んでしまった……。

12年前……。

俺はまだ、家で薬草や漢方について学んでいた。

学ぶと言っても、ただ単にどんなものが薬の原料になるかという知識を学んでいただけだ。

だから、友達と言える様な友達はいない。

一人自分の部屋で母さんと薬草の調合をし、日々を暮らしていた。

そんな明るく日、俺は星伽神社の近くの裏山に薬草を取りに行った。

いつもは母さんと共に取りに行くのだが、その日は父さんと一緒に星伽に呼ばれた。

しばらく山を散策して、薬草を大抵取って、帰ろうとした時、何かの呻き声が聞えた。

俺は呻き声のする方向に向かう。

すると、洞窟の様なところが現れて、その中から呻き声が聞える。

俺は懷に忍ばせていたクロロホルムを取り出し、ゆっくりと中に入る。

正直、怖かった。

逃げ出したい気持ちがあったのに、なぜか体が自然と行動を起こしている。

「誰かいるの？」

俺は少しだけ声を張って、洞窟の中に呼び掛ける。

すると、奥から巫女姿の少女が走って来た。

それが、白雪だった。

「君は誰？」

俺は白雪にそう問いかけた。

「白雪……。お願い！助けて！」

白雪はまるで堪えていた様に、涙を流した。

「泣かないで！助けてあげる」

俺がそう問いかけると、白雪は涙を袖で拭いた。

「こっちに来て！」

白雪はそういうと走って奥に行ってしまう。

俺は急いで追いかけた。

奥に進むと、銀狼が血を流して、倒れていた。

それが綺羅だった……。

「この子、怪我をしているみたいで……。ねえ助けてあげて！」

俺は始め、脅えたが、白雪は必死に訴えかけてきた。

覚悟を決め、深呼吸をし、銀狼に近付き、傷口を少し触れる。

「ここが痛い？」

「がるう……。」

俺はその唸り声を肯定と判断し、取って来た薬草を傷口に塗る。

「これでよしと……。後は治るのを待つだけだよ」

「ありがとう！」

白雪は嬉しそうに俺に礼を言って、綺羅に近付いた。

「よかったね」

と白雪は言いながら綺羅の頭を撫でた。

「それじゃあ助けを呼ぼう。狼煙を上げれば・・・」

俺がそういうと、白雪は落ち込んだ表情をした。

「・・・家を抜け出しちゃったの。だから・・・」

「そんなこと言ったって、このままこの狼をここで放置してたら死んじゃうよ」

俺がそういうと、白雪は落ち込んだ。

どうして俺は次のような言葉を発したのかは自分でも分からなかった・・・。

「一緒に、家に帰ろう。僕が連れだしたってことにしてさ」

「そんなことをしたら・・・貴方が怒られるよ・・・」

「大丈夫、君のことは護るよ。あ、名前まだ教えてなかったね、僕は姫神 薫。星伽神社がある山の麓に住んでるんだ」

俺がそういうと、白雪は驚いた表情をする。

「もしかして、姫神薬師の？」

「父さんを知ってるの？」

「うん！だって私の家の専属薬剤師だもん！」

俺は驚いた。

いや、白雪が星伽神社の家系だったことに驚いたのだ。

まさか、星伽の巫女がこんなところに居るとは正直思っちゃいなかった。

巫女姿であるところで気付くべきだったのかもしれないが、そんなこと考える余裕もないくらいに白雪は美しかったから……。

ただそれだけの理由で……俺は誓ってしまった……。

護るって……。

俺は綺羅を背負い、白雪と共に星伽神社に向かった。

星伽神社にたどり着くと、たくさんの巫女姿の少女達が白雪の名前を叫んでいた。

俺は危険を感じた為、木陰に隠れる。

「どうして隠れるの？」

「今出て行ったら、この子がどうなるか……」

俺は綺羅のことを心配した。

もし出て行って、綺羅を射殺されたら嫌だから……。

でも、心の中では脅えていたのかもしれない……。

自分が狼を庇ったことで、白雪にも迷惑をかける気がして……。

「おい、薫……」

俺はその声に慌てて声のする方を見る。

そこには、弓を持った父さんと母さんが居た。

「父さん、母さん……」

「おい薫！その背負ってるもんを置いて白雪様とこっちに来い！！」

父さんと母さんは弓を構えた。

俺は悟った……。

このままでは綺羅が殺される……。

それだけは嫌だ！

そう心の底から思った。

俺は綺羅を下し、覆いかぶさる形でかばった。

「何の真似だ！？薫！！」

「早く離れなさい！！」

父さんと母さんのどなり声でも、俺は脅えてしまった。

「白雪、君は父さんと母さんのところに行つて。危ないよ」

「でも・・・」

「たかが狼でもさ、僕の大切な友達なんだ。それに、白雪だって大切な友達だから怪我させたくないし」

俺がそういうと、白雪も同じように綺羅に覆いかぶさった。

「白雪！」

「私だって同じだよ。この子も薫も私の大切なお友達・・・」

正直、俺達は馬鹿なことをしているのは子供の時の俺でも分かった。

今の自分だったら、死にたいくらいに恥ずかしい・・・。

「ハア・・・、どうやら襲つては来そうにないな・・・」

父さんはそう言って弓の構えを解いた。

母さんも構えを解いた。

そして、父さんは歩み寄って来た。

「二人とも、退いてくれ。傷を診る」

俺はその言葉を聞いて安心した。

父さんは薬師である以前に医師として働いていた履歴がある。

だから、任せられる。

その後、時間はかかったものの、綺羅の傷も治り、家で飼うことになった。

もちろん、俺が面倒を見た。

ちょっと遊び心で言葉を教えたら喋るようになった。

まあ、そんなことはどうでもいい・・・。

それから4カ月が経ち、綺羅も俺に懐いた。

もうじき、夏祭りの時期になるといいうとき、俺のばあちゃんが実家

に帰って来た。

ばあちゃんは、武装検事という役職で強い。

いつも突発的に帰ってくるため、謎が多い。

今回も突発的に帰って来た。

その時、気づくべきであつた……。

後継ぎが俺しかいないということに……。

「おお薫！ 久しいな」

ばあちゃんはとても呑気である。

が、強い……。

「久しぶりです……おばあちゃ……」

俺が言いきる前に右ストレートが俺の腹部を思いツきり殴って来た。

この人の前ではばあちゃんとか年増とかの隊食いの言葉は厳禁なのを、この時知った。

まだ小学生にもならない五歳児に対して、右ストレートで腹部を殴ったのだ……。

俺がもし、普通の子供だったら死ぬぞ……。

「なにか言ったか？薫」

「い．．．いいえ．．．．．なんでも．．．．．」

小学生になる前にこういう恐怖を覚えてしまうとはな．．．．．

「そうかそうか。それより、お前を特訓してやる」

特訓．．．．．俺は正直、俺を抹殺するための口実に聞えてならなかった．．．．

だから俺は何か悪いことをしたのかと頭で探ったが、見つかるはずはない．．．．。

なんせ、ばあちゃんと会ったのは、俺が2歳の頃だからな．．．．。

それ以来、今回が2回目である。

「と、特訓って何ですか！？」

「お前をランクSクラスの武偵にしてやる」

俺はこの時、まだ武偵になるなど、冗談だと思っていた。

「そんな．．．．．で、でも僕は薬師になるって．．．．」

「そうだ。だが星伽の薬師になるということは、緋巫女様を護らないといけないだろ？だから、その特訓さ」

ばあちゃんの言ってることは確かに正しかった……。

正しいと思えたからこそ、頑張れたのかもしれない…………。

俺はばあちゃんの特訓に耐えた。

その間にキンジとも出会った。

3人で花火も見た。

それが唯一の楽しかった夏の思い出だ。

そして2カ月が経った…………。

たった2ヶ月しかなかったものの、S & a m p・W M 5 0 0を両手で撃てるようにはなった。

ばあちゃんは帰り際に、M 5 0 0を俺に託してくれた。

立派な薬師になれという言葉と共に…………。

その帰り、家の前に銀色の三つ編みをした少女と出会った。

彼女は俺に気づき、振り返ると、微笑み、去って行った。

恐らく…………いや、確実にあれが魔剣デュランダルだった…………。

しかし、あの時の少女の顔は、この世を信じていない様な眼であった…………。

まあ気持ち分からんでもなかったが・・・。

そして俺は12になり、武偵中に通った。

15になつて俺は薬専高に進路を変えた・・・。

地下鉄サリン事件の恐怖を父さんから聞いたからだ。

薬師というのは、ただ単に薬草の調合などをしているわけじゃない。

薬に関するすべてを知らなくてはならないのだ。

例え毒だと分かっているにしても、それを知らなくては意味が無い。

そう思ったからだ。

なんでも、俺は行動した。

いつの間にか、キンジと白雪とは離れ離れになつた・・・。

俺のわがままのせいもあつたのかもしれない・・・。

だけど、後悔はしていない。

なぜなら、今また、キンジと白雪に会えたからだ。

俺は今までの過去を振り返り、そう思うのであつた・・・。

8弾 A l o s t c h i l d

そして、俺は過去を振り返りながら武偵高に到着した。

「おいおい・・・青森の武偵高よりデカイじゃねえか・・・」

「当たり前だ。ここは東京武偵高・・・、あんな小規模な武偵高とはわけが違う」

俺はそう言いながら、歩き出す。

綺羅もついてくる。

一応教務科の方に行き、了承を得る。

そして教室に向かう。

その途中、視線が痛かった・・・。

綺羅に対しての目線ではない・・・。

綺羅と歩いている俺に向けられる視線が・・・。

教室にたどり着き、席に着いた。

もちろん、みんなは脅えて離れている。

俺は外窓際の最後尾の席のため、綺羅は俺の後ろでうつぶせの状態
で寝ている。

まさか、青森武偵中の時と同じような状況になるとは…………。

すると、数名の女子が綺羅に近付き、撫でたりする。

まあ綺羅は咬みついたりしないから気にしないが…………。

だがコイツは女好きだ…………。

すると、綺羅は眼を覚ました。

「薫、いつになったら授業が始まんだ？」

綺羅が喋った瞬間、周りの空気が重くなり、綺羅に視線が集中した。

コイツはKYだ…………。

「もう少しで始まるから寝てる馬鹿」

俺はそう言って、顔を伏せる。

そして授業が始まり、普通どおりに過ごした。

そして授業が終わり、キンジと綺羅と共に屋上に向かう。

「でもなんで狼連れて来てんだよ？」

「仕方ないだろ。父さんからの命令なんだから…………」

「でも安心しろよ遠山。俺がここに居るのはある事件が解決するま

でだ・・・」

「ある事件？なんだそれ」

「キンジには関係ないさ」

俺がそういった瞬間、綺羅が停まった。

「どうしたんだ？綺羅」

「いやあれ・・・」

俺は綺羅が見ている方を見る。

そこには女子更衣室から出てくる白雪の姿であった。

「白雪じゃねえか。おーい！」

とキンジが呼びかけるが、ちらっと見て去って行った。

いつもの白雪じゃないと俺は感じた・・・。

「薫、あいつをつけるぞ」

そう綺羅が言った為、やはり違ったのだろう・・・。

「キンジ、ちょっと用事思い出したから昼は一人で食べてくれ」

「別にいいけど・・・、どうしたんだ？」

「ちょっとな」

俺はその後、綺羅と分担し、さっきの偽白雪を探すことにした。

俺は薬物科の学科塔の辺りを探していた。
メデイシン

よく考えれば、こんなところに居るわけないんだよ……。

一般生徒でさえ、避ける学科塔だぞ……。

俺はそんなことを思いながら歩いていると、一人の少女が海を眺めて立っていた。

その後ろ姿は、昔、出会った銀髪の三つ編みの少女であった。

デュランダル
「魔剣！」

俺は懷からM8000を取り出し、魔剣に銃口を向ける。

「人に付けられた名で呼ばれるのは好きではない」

そういつて少女は振り返った。

あの時であった少女で間違えではなかった……。

「ならなんて呼べばいいんだよ？」

「我が名はジャンヌ・ダルク30世……」

「ジャンヌ……ダルク……だと!？」

俺はその名を聞いたことはあった。

が、10代で火刑にかけられ、子孫は潰えたと思っていた……。

だが目の前に居る。

となると考えられるのは……

「影武者が火刑にかけられてたつてことか……。面白いことするよな……」

「お前は星伽の護り銃士だろ？ 姫神薫」

俺は銃を下し、懐になおす。

「何故知っている？ そのことは俺の家系の者にしか知らされていないはず……」

すると、魔剣は薄らと笑った。

「姫野から聞いていた」

やっぱりか……。

俺の家系は姫と名字に付く家系はすべて繋がっているとじいちゃん
は言っていた……。

死に際に言っていた言葉だったので忘れはしない……。

愛美も姫川という姫神家の家系の一族、姫澤も姫神家一族だ。

「どうやら、お前を捕まえないといけないな・・・」

「捕まえる？」

魔剣は疑問形で返してきた。

「お前、白雪を誘拐する気だろ？なら、今の内に捕まえるのが得策じゃないか？」

「フツ、笑わせるな。お前如きに倒される私ではない！」

そういうと、魔剣は剣を取り出した。

俺はもう、銃で相手をするのはダメだと感じていた。

どうせ避けられて、懷をぐさりと刺されたら終わりだ。

俺は懷からバタフライナイフを取り出し、構える。

「そんなモノで私に勝てると思っているのか？」

「勝てる・・・といったら？」

「フツ、ならばやってみろ！！」

魔剣はそう叫びながら俺に斬りかかった。

一か八か・・・俺はバタフライナイフを投げる。

バタフライナイフは一直線に魔剣の方に飛んでいく。

魔剣はそのナイフを剣で弾いた。

ナイフは俺の方に返ってくる。

やっぱりダメか……。

俺は心の中で思いながら、弾かれたナイフをうまい具合に柄^えをキヤツチして魔剣を受け止める。

「ほう、結構やれるんだな」

魔剣は余裕の表情を見せる。

「こう見えても武検に鍛えられたからな!!」

俺はそう言いながら、跳ね返す。

「今回は身を退こう。だが、邪魔するのであれば次は凍らせてやる」

魔剣はそう言つて、去つていった。

「チツ……逃がしちゃったか……」

俺は感覚のない手を見る。

俺の手は、霜がついていた。

氷の超偵…………。

白雪の逆ってことか…………。

俺は冷えた手をポケットに入れ、体温で手を温める。

そして、立ち上がり、職員室に向かう。

その途中、綺羅と合流した。

「こっちの方には居なかったぜ。そっちは？」

「…………やられた。両手をな…………」

俺はさっき魔剣にやられた手を見せる。

「こりゃ酷エな…………」

「軽い凍傷だ。だが薬さえ塗っておけば治るって」

綺羅は心配そうな顔をした。

「心配すんなって。それよりこのことは誰にも言っな」

「なんでだよ？早く白雪に知らせねえと…………」

「そうしたいが、あいつの居たって証拠が無い」

「それならその怪我で…………」

「薬物を扱う者にとっては日常茶飯事だ。そう思われたら終わりだ
る？だから、今は黙っておくんだ。俺
は陰ながら白雪を護衛する。それでいいだろ？」

「……わかった」

そして、授業がすべて終わり、俺は寮に帰った。

寮に帰り、手に薬草の薬の塗って、包帯をした。

しかし、ヒリヒリするな……。

さっさと寝ようかな……。

俺はそう思い、眠りに就いた……。

翌日、今日は休みだ。

傷がまだ痛むため、今日は眠って過ごそうと考えていた。

ピンポーン……。

とチャイムが鳴った。

そして、チャイムはどんどん速くなってくる。

こんな鳴らし方をするのは、アリアしかない……。

俺は渋々、玄関に向かい、ドアを開ける。

そこには、休みなのに制服を着たアリアが立っていた。

「朝っぱらから何の用だ？」

「いつまで寝てるつもり？もう10時よ！」

「はいはいわかったわかった……。で、何の用だ？」

「荷物を運ぶの手伝って」

「荷物？」

俺はアリアの後ろを見る。

そこには箆笥を運ぶ武藤とキンジが居た。

「誰か同居人が入るのか？」

「違うわ、白雪をキンジの部屋で護衛することにしたのよ」

「もしかして、魔剣からか？」

「ええ、それでアンタにも協力してもらっわよ」

「協力って・・・」

「白雪の護衛をね」

「・・・・・・・・わかった」

俺はそう言って、荷物運びを手伝った。

怪しいモノが無いかを調べた後、俺は制服に着替え、近くのファミレスに向かう。

というか、昼食を食べに行くとアリアが言い出したのだ。

一応、懷にクーガーを装備して、キンジと白雪が仲良く話す1m後ろをアリアと歩く。

「アンタ、手どうしたの？」

「・・・・・・・・ちょっと火傷をしたただけだ」

「そう・・・」

「アリア、俺はお前のこと信じる・・・」

「・・・・・・・・ありがとう」

アリアはそう言って、黙り込んだ。

そして、まだ12時になる前だったのでファミレスは空いていた。

席に案内され、奥に白雪とキンジ、手前のキンジ側にアリア、白雪側に俺が座った。

注文を終え、俺は気になっていたことを問いかけることにした・・・。

「この支払いって割り勘だよな？」

「・・・アリアの奢りだろ？」

「なんで私が払わないといけないのよ!？」

「ハア!? 俺財布持ってきてねえぞ!！」

「あ、あたしだって持ってきてないわよ!！」

「白雪は!？」

「ごめん・・・」

つまり財布を持っていないということはどうすんだ馬鹿野郎・・・。

「薰! アンタは持ってきてるわよね!？」

俺は懐から財布を取り出し、中身を確認する。

幸か不幸か、1万円札が1枚だけ入っていた。

しかしこれは今月の生活費・・・。

昨日までは5万程備蓄していたが、いろいろと出費が嵩んだため、今は残り1万だけだ・・・。

「お前らから後で徴収してやる・・・。」

俺がそう言つと、3人はホツとした・・・。

そして、運ばれてきた定食を食べようと、箸を掴んだ時、手に激痛が走り、箸を落とす。

「どうした？」

キンジが問いかけてきた。

「ちょっとな。お手洗いに行ってくる。」

俺はそう言つて、席を立ち、トイレに駆け込む。

そして、包帯を解いて、手を見る。

手は思っていた以上に酷くなっていた。

「これじゃ、銃も握れそうにないな・・・。」

すると、ガチャツと誰かが入ってきた。

俺は急いで手を隠す。

しかしそれはタダの一般人であつた。

俺はポケットに忍ばせていた錠剤の痛覚麻酔剤を飲み、痛覚神経だけを麻痺させた。

そして、包帯を巻きなおし、席に戻った。

「悪い、少し頭痛がしてな」

「大丈夫なのか？」

「ああ、薬を飲んできたから問題ない」

「そうか、ならさつさと食っちゃえよ」

お前の金じゃねえだろ・・・。

俺はそう思いつつも、食べた。

しかし、味が分からない。

痛覚麻酔剤は、痛みこそ消えるが、その代償のように味覚も麻痺してしまう。

分かると言えば匂いだけだ。

俺はそのまま食事をした。

食べ終わり、料金を払った。

合計¥6865・・・。

残りの生活費は¥3135・・・。

暮らせるか!!

俺は心の中で叫んだ。

しかし、帰ってからちゃんと払ってくれた為、なんとかなった。

だが¥10000で生活できるわけないだろ・・・。

まあ、2週間後には薬連から給料が入る・・・。

入ると言っても、¥180,000に報告報酬で+¥50000だ。

でもこれだけあれば1カ月は何とかかな・・・。

だが後2週間、¥10000で過ごさなくてはならない・・・。

俺はそう思いつつ、自分の部屋で寝転んだ。

不意に俺は送られてきた招待状を見る。

それは5カ月に一回、薬連主催研修旅行の招待状である。

旅費はすべて薬連が負担してくれるのだが、俺は一度も参加したことはない。

というか、参加したところで、ただの薬物研究所で演説を聞く程度だ。

だから俺は、参加しないのである。

今回はどうやらイギリスとフランスに7泊8日で3日後に出発らしい。

「イギリスは昔、嫌なほど行っただって……」

俺はそう思いつつ、招待状をゴミ箱に投げ入れた。

っていうか、綺羅はいつまで寝てるんだ……？

俺は寝室に入ってみる。

ベッドには綺羅がうつ伏せの状態で寝ていた。

「まったく……、綺羅はいつまでもかわんねえな……」

俺は綺羅の横に座り、綺羅の頭を撫でる。

するとグルルウと喉を鳴らした。

これは威嚇ではない、ただ気持ちがいい時に発する唸りらしい。

俺はそのまま横になり、目を閉じた。

そして休みが明けてアドシード前日……。

今日は東京ウォルトランドで花火大会があるらしい。

俺はあまり人の集まるようなところには行きたくはない。

人混みの嫌いな俺にとって、地獄の様な耐えがたいからだ。

さてと、学校に行くかな……。

「綺羅、今日は学校行くのか？」

「今日は止めておく」

「そうか。じゃあむやみな外出は控えるよ」

「お」

俺は制服に着替えて、学校に向かう。

どうせ、一昨日に飲んだ酒が残っているんだろう。

狼は匂いでも酔うらしい……。

笑えるぜ……。

そして俺はバス停でバスを待つ。

まだ後10分ある。

キンジはまた遅刻か・・・。

そしてバスが来たため乗り込み、武偵高に向かった。

そして授業を受けて昼休みになる。

教室を出ようとした時、江川がやって来た。

「なんですか？」

「君に頼みたいんだけど、第3備品倉庫にある火薬類の点検をお願いできないか？君しか火薬に詳しい生徒が居ないみたいなんだよ」

「^{アムド}装備科に言えいいでしょ」

「それがね、アドの準備でみんな忙しいらしい」

仕方ないか・・・。

「分かりました。今から行ってみます」

「頼んだよ」

そう言って、江川は立ち去った。

俺は第3備品倉庫に向かった。

備品倉庫にたどり着き、キーコードを入力して梯子を下りて行く。

俺は防爆のLED懐中電灯をつけて、奥に進む。

周りを見渡すと、<火気厳禁><銃器禁止><DANGER>と書かれた箱と表示看板が鎖に繋がれてぶら下がっている。

あはは・・・、仕方ない・・・。

俺は近くに有った箱の蓋をナイフで抉じ開ける。

中には小箱に入った黒色火薬ガン・パウダーがいくつも入っていた。

小箱を一つ取り、開ける。

中にはさらさらな状態で火薬が入っていた。

「これは上等な火薬を仕入れてんな・・・」

そして小箱を元通りに直し、箱を元の場所になおす。

ま、一つさえ見ればほとんどが同じだが、念のためにエリアごとにチェックしておくか。

俺はあと4箱をチェックした。

そして全部が異状なしであった。

俺は生徒手帳を取り出し、ここの見取り図を見る。

出口はどうやら一か所だけの様だ・・・。

非常用にもう一つ通路があるようだが、それは海に繋がっている為、普通は使用できない。

もしここで魔剣と戦うことになったら厄介だ・・・。

さてと、帰るとするかな・・・。

すると携帯が鳴った。

『あ、薫か?』

「その声はキンジか・・・。何の用だ?」

『実は放課後、花火を白雪と見に行くんだが、一緒に来るか?』

「却下」

『なんでだ？』

「俺は暇じゃないんだ……。後、花火は見たくない……」

目の前に火薬が大量にあるから連想したくない……。

『わかった、じゃあまた何かあったら連絡する』

そう言ってキンジは電話を切った。

正直、こんなところからは早く出たい……。

恐らく、^{メデイシン}薬物科だったらみんな逃げたいとを感じるだろう……。

俺は携帯の時計を見る。

既に3時を回っていた。

直帰でいいよな……。

俺はそう思いつつ、梯子の方に歩き、帰った。

その日の夜、俺はベランダからウォルトランドの花火を肩肘をつきながら見ていた。

するとそこへ綺羅がやって来た。

「薫、明日はアドシールドなんだろう？」

「・・・ああ」

「なら白雪をちゃんと護衛しろよ」

「わかってる・・・」

俺はそう言って、部屋を出て、ピッキングでキンジの部屋に入る。

そして、白雪の制服に入っている生徒手帳にGPSチップを挟んだ。
ちなみにどこで手に入れたかというと、薬剤運搬時に使用されるチップの為、薬専高から持って来たアタッシューケースに何億枚も入っている。

使わなきゃ損するからな・・・。

そして、俺は部屋を出て、ちゃんとカギをかけ、綺羅の居る自分の部屋で眠りに着いた。

翌日、面倒臭いが学校に向かう。

学校に行ったとしても何もすることはない。

だから、俺は受付をしていた。

入場券を半分に分けて、入場者に半券を渡す。

ハア・・・、武偵で一番地味なのは俺達薬物科かもしれないな・・・。

俺はそう思いつつ、受付をしていた。

しばらくして、武藤とキンジが入れ替わった。

「白雪はどうだ？」

「今のところは大丈夫だ。ま、このまま何も起きないんじゃないかねえの？」

「・・・それはない。魔剣あいつは必ず来る・・・。絶対にな・・・。」

「魔剣デュランダルなんて架空の存在なんだよ」

どうせ、こいつは俺の言うことは信じちゃくれないだろうな・・・。

「キンジ、だからといって警戒を解くには早いからな」

「はいはい・・・。」

「それはそうと、アリアはどうしたんだよ？」

「知るか・・・あんな奴・・・。」

キンジはそう言って、黙り込んだ。

喧嘩したのかよ……。

てことは戦力が不足だな……。

俺は自分の掌を見て思う。

そして掌を握る。

すると、GPS探査携帯が鳴りだす。

探査携帯を取り出し、見ると、白雪がどこかに向かっている様な動きであった。

確かこの方向……

すると、綺羅と綴が走ってやって来た。

「おい遠山！白雪はどうした！？」

「な、なんだよお前！」

「答える！」

綺羅が柄にもなく焦っている。

「一体何があつたんです？」

俺は綴に問いかける。

「星伽がどこにもいないんだ！お前心当たりはないか！？」

「今のところは何も・・・」

「とにかく捜すぞ！俺はあっちを捜す、先生は校舎内を頼む！」

「わかった！」

綴と綺羅は去っていった。

「俺達も捜すぞ・・・」

俺がそう言うが、キンジは俯いている。

「俺のせいだ・・・」

俺はそう呟いたキンジの手を見ると携帯が握られていた。

恐らく、何か白雪からメールが来てたんだろ・・・。

「今は嘆いている場合じゃねえろ！」

「でもよ！」

「俺が知ってるキンジはそんなに臆病じゃなかっただろ！！あんときだって白雪に花火を見せてやったじやねえか！！」

俺がそうキンジに怒鳴りつけると、やけになったようにキンジが走りだした。

それでいいんだ・・・それで・・・。

すると、GPSが白雪の行方を見失った。

最後に捕えたのは・・・第3備品倉庫・・・。

俺の読みはどうやら皮肉にも当たっちゃったみたいだ・・・。

頭の中には昨日見た火薬が爆発した時のことが頭をめぐった・・・。

9弾・The ice thawed・

俺はGPSの情報をもとに、第3備品倉庫に向かう前に、アムト装備科に急いで向かった。

装備科にたどり着くと、小学生くらいの少女だけが居た。

「あのさ、君！」

「はいはいなのだ！いらっしゃいなのだ！」

「あ、ああ……。それより、ボウガンないか？」

「ボウガン？ちょっと待ってるのだ！」

そついうと、少女は奥に行ってしまった。

ボウガンなら、火薬は関係ないから安心だ。

「ボウガンは無かったのだ。でも、弓はあったのだ！」

「それでもいい！」

すると、少女は手で金を要求してきた。

「……。いくらだ？」

「一万円なのだ！」

生活費ピツタリ！

仕方ない・・・今回は四の五の言ってる場合じゃない・・・。

「わかった・・・」

俺は財布からお金を出し、渡す。

「毎度有りなのだ！」

俺は弓と矢を持って第三備品倉庫に急いだ。

そして第三備品倉庫にたどり着いた。

息を整え、矢を構えながら中に入る。

すると梯子のハッチが空いている事に気づいた。

やはりキンジが先に来ているみたいだ。

俺はその梯子を降り、行きたくないが、火薬の置いているところに向かう。

足音を立てないように歩く。

するとひんやりとした空気が足元からした。

一部だけ、凍っていた。

俺は隠れながら、凍っているところを見渡す。

そこには、キンジが動けない状態で倒れていた。

「貴様も来たのか、姫神」

その声は機械で変えられた声だったが、魔剣^{デュランダル}だ・・・。

隠れた意味ないじゃねえか・・・。

「来ちゃ悪いか？」

「邪魔をすれば凍らせると言っただろ？」

「凍らされたからといって、俺が星伽護り銃士の血を引いていることに変わりはない！」

俺は弓を構え、目を閉じる。

「一矢総点・・・緋緋鷹斬^{ひひようき}・・・」

俺はそう呟き、矢を放つと、矢は炎を纏いながら魔剣が居る方に飛んでいく。

しかし、剣で跳ね返された。

キンジを捕えていた氷も解けた。

白雪も驚いた顔をする。

正直、俺は思った言葉を呟いただけだ。

俺にこんな力があつたとは夢にも思わなかった・・・。

「やはり貴様はただ者では無いな・・・」

魔剣はそついうと、白雪を闇へと引きずりこんだ。

「チツ・・・逃げられた・・・」

すると後ろからアリアが走ってきた。

「白雪は!?!」

「連れて行かれた」

キンジは自力で立ち上がる。

「奥に進むぞ」

キンジが一步踏み出した瞬間、アリアが呼びとめた。

「なんだよ?」

キンジがそう問いかけると、アリアは小太刀を取り出し、振り上げて、振り下ろした。

するとプツンプツンと糸が切れる音が聞えた。

「ピアノ線よ。それより、先に進むわよ」

「ああ」

俺は弓を再び構えながら先に進む。

警戒しながら歩いていると、白雪が鎖で縛られた状態でいた。

「白雪!!」

キンジはそう叫びながら走り寄り、口をふさいでいた布を取った。

「キンちゃん……。大丈夫!? 怪我しなかった!?」

「俺は大丈夫だ。お前こそ……」

俺はアリアと共に、白雪を縛っている鎖に繋がれた鍵を開けようとピッキングをする。

「アンタ、アンロックスキル持つてるの?」

「ああ、中学の時にはあちゃんから教わった。俺ができるのは警報装置がついたカギまでは警報を鳴ら

さない程度で解除できるが……。これは厄介な南京錠だ……」

「どうだ!?!」

キンジは焦っている様で問いかけてくる。

「無理だ……。時間がかかりすぎる……」

すると、ザバンツという音と共に海水が流れ込んできた。

「チッ！キンジ、ここはお前に任せる！俺は上に行つて魔剣から鍵を奪ってくる！」

「わかった！でもあいつがどこに行つたか分かるのか？」

「この構造は昨日調べた。恐らく、天井ハッチから上に行つたと思う」

「わかった！アリア、お前は薫と行け！」

「どうしてよ!？」

「理子から貰った資料で読んだ。お前泳げないだろ!？」

「な！浮き輪さえあれば泳げるわよ！」

「こんなところにンなものあるか！とにかく薫と行け！」

「行くぞアリア！もう時間がねえ!!」

俺はさっさと上の階に伸びる梯子を登り、弓を構える。

ここはどうやら火薬庫ではないみたいだな……。

俺は弓を肩にかけ、懷からクーガーを取り出した。

すると後ろからアリアが梯子を上って来た。

「アリア、俺は右側からまわる」

「それじゃ私は左からまわるわ。何かあったら大声で叫びなさい」

「そんな時はな。じゃ、お互いに気をつけるってことで」

俺はそう言つて、銃を構え、LEDライトで照らしながら歩く。

しかし、ここは異様に暗いな……。

ふと、電気ケーブルを見る。

どうやら、断線して、電気系統が機能していないらしいな……。

仕方ない……。今は修理している暇はない。

俺は再び歩きだし、つきあたりの角を曲がる。

すると、アリアと合流した。

「どうだった……。って……。聞かずともわかるか……。」

「アンタの方も見つからなかったみたいね……。」

「やっぱ一度戻って……。」

俺がそう言った瞬間、水があふれ出したような音が聞えた。

「今のって……まさか！」

「もう一杯になりやがったか……」

俺とアリアは走り、上がってきた梯子の方に向かった。

梯子のあったところにたどり着くと、そこにはキンジが立っていた。

「キンジ！白雪はどうした！？」

「なんとか南京錠をとれたが、水圧でここに吸い込まれた」

「じゃあ近くに居るんだな？」

「あそこに居る」

アリアは白雪に歩み寄った。

しかし……何か違和感がある……。

キンジであっても、白雪にあたっても……。

「白雪、唇大丈夫か？」

おいキンジ、何聞いてんだ？

「え？うん、大丈夫だよ」

白雪がそう言った瞬間、「アリア！そいつから離れる！！」と叫び、キングはベレM92Fを白雪に向ける。

俺も銃を向ける。

「ちょっと！二人ともどうしたのよ？」

アリアがそう言うと、白雪は刀をアリアの首元に突き付ける。

「ちょっと！アタ！」

「アリア！そいつは白雪なんかじゃない！魔剣だ！」
デューランド

「フッ、今さら気づいたところで遅い」

俺は無剣に気づかれないように懷から糸を取り出した。

糸といっても、魔剣が仕掛けたピアノ線をちょっとだけ翳め取った奴だ。

だが、これなら刀の刃に当たったとしても、角度によっては鰐のところに引っ掛かり、奪うことは可能だ。

俺は矢を2本取り出し、ピアノ線で繋ぐ。

今はキングが魔剣の気を引いている。

まだバレていないみたいだ……。

弓に矢をセットする。

そして、キンジの背中を突く。

「なんだよ？」

キンジは察したのか、小声で問いかけてきた。

「合図したら避ける・・・」

俺がそういうと、軽く頷いた。

早く魔剣の背後に來い・・・白雪・・・。

すると、奥の方にペンライトみたいなものが1度だけ光った。

それは一瞬でも、白雪の存在を知らせていた・・・。

俺はキンジの背中を一回叩く。

キンジは素早く避け、俺は弓を構えて、2本の矢を放った。

二本の矢は、真っ直ぐに飛び、刀を避けるようにして飛んだ。

矢につけられたピアノ線が鰐に引つ掛かり、刀を魔剣の後ろに弾き飛ばした。

そしてすぐに矢を抜き、二射目を放った。

これは、魔剣をアリアから離す為の矢だ。

魔剣は矢を避けるようにアリアから離れた。

アリアはこっちまで逃げてくる。

そして、後ろから白雪も刀を持って現れた。

「形勢逆転……といったところだな」

俺がそういつと魔剣はニヤリと笑い、煙幕手榴弾スモークグレネードを地面に投げつけた。

すると煙に反応したスプリンクラーが作動し、雨のように水が降る。

「お前らは私の姿を知らない。いや……姫神は知っているな」

魔剣の声は、まるで天の声のように倉庫内に響いた。

「薫、どういうことだ？お前魔剣と会ったことあんのか！？」

「ああ……一昨日な」

「なんで早く言わなかったのよ！？」

「言ったところで、アリアは一人で行動するからな……。それだけ回避はできたかったのさ」

すると、暗闇の方から魔剣が現れた。

「フフッ、さて、本番と行こう」

魔剣はそういうと、剣先をこちらに向ける。

「我が名はジャンヌ・ダルク30世・・・」

魔剣がそういうと、アリアとキンジは驚いた。

「ウソよ！？ジャンヌ・ダルクは10代で火刑にかけられた！子孫なんていないはずだわ！」

「あれは影武者だ。我らは策士の人間だからな、そんなことは容易い」

すると白雪は俺の方に歩み寄って来た。

「薫、ジャンヌとは私一人で戦う・・・。だから、薫はキンちゃん
とアリアを護って・・・」

「・・・わかった。でもヤバくなったら感じたら援護するからな」

俺がそういうと、白雪は頷いて、魔剣の方に歩いて行く。

俺は弓に矢をセットしておく。

「アリア、お前のガバには弾が入ってるか？」

「え、ええ。両方とも8発ずつ入ってるわ」

「キンジのベレは？」

「16発は入っている。でもどうして聞く？」

「3発ずつ俺にくれ」

俺がそういうと、キンジとアリアは顔を見合せる。

「どうしてだ？」

「俺の感が正しければ、あいつの弱点は火だ。最低限度の発火さえ起こせば十分だ」

「わかったわ」

アリアとキンジは3発ずつ、俺に弾をくれた。

俺はその弾から火薬を取り出し、懐に入れておいた処方紙に火薬を容れ、雨のように端と端を捻じる。

出来た数は6袋……。

もちろん、俺のクーガーからも取り出した。

そしてその火薬玉を矢の先端に結び付ける。

暗闇の奥では剣と刀がぶつかり合う度、火花が散る。

あともう少ししたら、白雪の息継ぎだ。

つまり、魔剣に隙を与えてしまう盲点時間……。

俺は弓を構える。

まだだ……まだ早い……。

次の瞬間、火花が小さくなった。

今だ！

俺はそう思い、火薬玉に少し切り込みを入れ放った。

矢が進むにつれ、火薬が毀れた。

俺は持っていた銃で床を撃った。

すると、床で火花が起き、火薬に引火し、どんどん矢の方に火が引火していく。

強引だが、これが一番最善だ。

矢は炎を纏い、白雪と魔剣の間を飛び抜けた。

魔剣は怯んでいるらしく、ふらついている。

俺は3矢一気に放ち、再び火花を起こす。

3本の矢は魔剣の前に炎を纏ったまま、落ちる。

「白雪！今だ！！」

俺がそう叫ぶと、白雪は禁制鬼道の技で、魔剣の剣をぶった切った・

・・・。

あれはいつ見ても、恐ろしい・・・。

ま、昔一度だけ見たぐらいだが・・・。

これで魔剣事件は終わりだな・・・。

その後、魔剣はマスターズ教務科に連行され、俺は手の処置を受けるべく、救護科で診察を受け、閉会パレードを遠くから見守った。

綺羅も明日には実家の方に帰るらしく、今日はばあちゃんのところに行っている。

もうこないということだが・・・。

10弾 A capital fellow

翌日……

俺は金もないから何もできない……。

魔剣事件は無料依頼ボランティアだったらしい……。

金がないから、冷蔵庫に入れてあった卵で目玉焼きと卵焼きを食べただけだ。

栄養バランス悪いな……。

今日は休みだから、何をしようかな……。

そういえば、あいつの見舞い……行っていないな……。

よし、今日行つとくか……。

俺はそう思い、私服に着替えて一応財布を持っていく。

携帯をポケットに入れようとすると、携帯が鳴った。

「はい、姫神……」

『失礼、姫神君。今、忙しかったか？』

「いいえ、丁度暇していたところです。で、何か用ですか？」

『ああ。実は君が発表してくれたインフルエンザウィルスの研究資料なんだが、イギリスの貴族一家に認められてね。報告しておこうと思って・・・』

「ハア・・・、で、それだけですか？」

『あ、あと君に薬連から臨時報酬が今日入る予定だ。ま、報酬と行っても¥100000だかな。報告はそれだけだ。また、研究結果に期待しているよ。それじゃ、また』

そう言つて、薬連の役員は電話を切った。

よかった・・・。

給料日までになんとか首の皮一枚で繋がった。

しかし、やっぱり半分は隼にやった方がいいだろう。

よし、最初に銀行に行つて、金をおろそう。

俺はそう考え、部屋を出た。

キンジ side.....

俺は今日……なぜかアリアの買い物に付き合っことになってしまった……。

こういう時はゆっくりしたいものだ。

「アリア、なんで俺がお前の買い物に付き合わないといけないんだ？」

「どうせアンタ暇でしょ。だから誘ったの」

誘ったというより脅しだったかな……。

ま、命がけの依頼クエストじゃないし、買い物ぐらいならいいか……。

俺はそう思い、アリアについて行っていると、アリアは立ち止った。

「どうした？」

「アレ、薰じゃない？」

アリアは銀行の方を指をさす。

そこには、薰が銀行員に見送られていた。

薰は銀行員に一礼し、行ってしまった。

「つけるわよ」

アリアはそう言って、俺が止める間もなく歩き出した。

仕方なく俺も追いかける。

しばらくつけていると、薫はとある花屋に入っていた。

「花屋か？」

「ええ。でもなんであんなところに・・・」

すると、花束を持った薫が出てきた。

見た目からして、誰かの見舞いか・・・。

「デートかしら？」

「は？あいつに彼女が居るようには見えないが・・・」

「でもアレ・・・」

まあ・・・あいつに彼女が居たとしても、自分から言っような奴じゃないし・・・。

再び、薫の後をつけた。

次に薫が立ちよったのは八百屋であった。

八百屋でフルーツバスケットを買い、再び歩き出し、俺とアリアはそれをつけた。

しばらく歩くと、薫は国立病院の中に入っていた。

「ここって……」

「国立病院だ……。でも薫の奴、なんでこんなところに用があるんだ？」

「とにかく、中に入るわよ」

アリアはそう言って、病院の中に入っていった。

俺も中に入る。

しかし、薫の姿は無かった。

つまり見失ったというわけだ。

「どこに行ったんだ？」

「わからないわ」

周りを見渡すが、薫の姿はどこにもなかった。

「おゝ遠山君だゝ」

という声がし、後ろを振り返る。

そこには、白衣を着た女性が、白衣を着た少女を引き連れて、右手を挙げていた。

「ええっと……どちら様で？」

俺がそう問いかけると、女性は溜息をついた。

「そうだよね……。たった一回じゃ覚えてくれないよね……」

「ちょっとキンジ！一回つてどういうこと！？」

「ちょっと待てアリア！何を勘違いしているか知らんが、俺も知らない！」

「仕方ありませんよ、遠山さん。貴方が姫川さんにあつたのは、ハイジャック事件で薬連空港に不時着した時、一度お会いになつた程度ですから」

そう女性の横に居た少女が説明した。

なんだか、無表情で、レキに似ている。

だが、彼女のおかげで思い出した。

「あの時の……」

「誰よ？」

そういえばアリアは気絶してたしな……。

「この人は姫川さん。ハイジャック事件の時に協力してくれた人だ」

アリアは興味無さそうな表情になった。

なら聞くなと思ったが、いちいち突っ込んでたら限が無い。

「それはそうと、遠山君、こんなところに彼女と何の用なの？」

「「彼女じゃない!!」」

俺とアリアはハモってしまった。

「息もぴったりですね」

少女はそう言つて、目を反らした。

何を感じたんだ……君は……。

「ごめんなさい。で、何しに来たの？」

「どうせ、薫さんをつけてきたんですよね？」

俺とアリアは少女の言つた言葉にギクツと思った。

「そつみたいね……」

するとナースの一人が、姫川さんに歩み寄り、耳元で何か囁いた。

「わかりました。すぐに行きます」

姫川さんがそういうと、ナースは去っていった。

「ごめんなさい、今から私検査なの。それじゃ美春、二人を薫のところの連れて行ってあげて」

「わかりました。お大事に」

少女がそういうと、姫川さんは去っていった。

「さて、私の名前を覚えていませんでしたよね。私は、姫澤 美春
といいます。以後お見知りおきを、
遠山さん、神崎さん」

少女……もとい姫澤は一礼した。

「それでは薫さんのところに案内いたします。ついて来て下さい」

姫澤はそういうと、歩き出した。

俺とアリアは姫澤について行く。

「なあ」

俺が姫澤にいうと、立ち止り、振り向いた。

「なんでしょうか？」

「アンタと薰ってどういう関係だ？」

俺がそう問いかけると、無言が続いた。

「……………知りたいですか？」

「べ、別に喋りたくないなら喋らなくてもいいけど……………」

「喋りたくないわけではありません。ですが……」

姫澤は前を向いた。

「ここでは話せない……」

そういつて、再び歩き始めた。

なんか、訳ありみたいだな。

俺はそう思いつつ、ついて行く。

そして、とある病室の前に停まった。

「恐らく、薫はここに居ます」

俺はその病室の表札を見る。

< 姫澤 春美 > と書かれていた。

「姫澤って……」

「私の双子の姉です」

姫澤はそういつと、ドアをコンッコンッとノックをし、スライドドアを開ける。

そこにはベッドで上体を起こしている少女が、スケッチブックを持ってこつちを見ていた。

姫澤とは髪色と眼色は一緒だ。

髪型はロングストレートヘア……。

「なんでお前らがここに居んだ？バカカップル」

「か、カップルじゃないわよ！！」

アリアは顔を真っ赤にし、叫ぶ。

すると、ベッドに座っていた少女がスケッチブックに文字を書き始めた。

そして、スケッチブックに書いた文字を見せてきた。

そのスケッチブックにはくお静かに！！>と書かれていた。

「そうだぞアリア、ここは病院なんだ。静かにしてる」

俺がそういうと、アリアはなぜか俺を睨んできた。

「…………一応言っておくが俺とアリアは…………」

「パートナーだろ？知ってるよ。さっきのは冗談だ」

なら言っとな俺は思った。

しかし……、独りでこんな広い病室って金持ちかよ…………。

すると少女がスケッチブックを見せてくる。

<貴方がたは薫の何ですか？>

「まあ友達だ」

<武偵？>

「ああ」

<なら帰ってください。私は武偵が嫌いです>

俺は書かれたことに少し動揺した。

「悪いな、キンジ、アリア。話なら外でもできるだろ」

薫はそういうと立ち上がった。

「じゃあ春美^{はるみ}、話がすんだら戻ってくるから」

<うん>

そして、俺とアリアは薫と共に病室を出て、病院の中庭まで出た。

薫side・・・・・・・・

「で、人をつけるってどういうことだ？」

「あのベッドに寝てた子、一体誰なの？」

質問返しかよ……。俺の質問にも答えてほしいもんだな……

「一体誰よ？」

言いたくない…………。

「春美と美春は去年まで、薬専高でチームを組んでいた仲間だ」

「それだけ？」

言いたくないって…………。

すると、出入り口の方から美春が歩いてきた。

「薫さん、もうそろそろお帰りになっても構いません」

「でもよ、昨日も胸痛が出たんだろ？誰か着いてとかないと……」

「大丈夫です。先生も今は落ち着いていると仰っていましたから」

「…………そうか。なら、俺は帰る」

「はい」

美春はそう言って、振り返り、入口に向かっていく。

「あの子、何の病気なんだ？」

「ちょっとした心臓病だ。まあ気にしないでくれ」

「でも喋らなかつたわよ？」

「それは別でさ……。あいつ、俺が留守にしてる時に研究所で倒れて、気化した高濃度の毒ガスを吸っちまったんだ。それ以来、あいつは喋れなくなつてな……」

俺は近くに有つたベンチに座る。

アリアも隣に座つた。

「で、なんでつけてきたんだ？」

「別に意味はないわ。ただアンタが歩いていたらつけただけよ」

理由になつてないな……。

でもあまり突つ込んだら、あとあと面倒だ……。

軽く流しておくか……。

「ま、別にいいけど……」

するとナースが慌てているのが、見えた。

何かあつたのだろう……。

すると、出入り口から美春が慌てて飛び出してきた。

「薫さん！！姉さんの容態が急変しました！！」

美春は震えた声で俺にそう叫んだ。

俺は慌てて立ち上がり、春美の病室に向かう。

病室にたどり着くと同時に、ストレッチャーで春美は運ばれていく。

「先生！春美は！？」

「今から緊急オペに入る！君は美春ちゃんについていてあげてくれ！」

「分かりました！春美のこと、よろしくお願いします！」

俺がそういうと、先生は頷いて、手術室に向かった。

美春はその場に崩れ落ちた。

もうこの世の終わりといわんばかりの絶望の表情だ。

今までにこんな表情を見たことはない……。

俺は美春に肩を貸し、手術室前の待合室まで連れて行った。

なぜか、キンジとアリアが居るが、無視しておこう。

「美春、大丈夫か？」

「・・・・・・はい」

俺は立ち上がり、近くに有った自販機で缶コーヒーを買い、美春に渡す。

「要りません・・・・・・」

「飲まなくてもいいけどよ、受け取ってくれ」

俺がそういうと、美春は俺の顔を見つめてきた。

「すみません・・・・・・」

美春は缶コーヒーを受け取った。

「アリア、キンジ、先に帰ってきてくれるか？俺は明日までここに居る」

「わかった・・・・。アリア、帰るぞ」

「ええ・・・・」

キンジはアリアを引き連れて帰っていった。

手術が始まって4時間が経過した。

未だに出てこない・・・。

美春は泣きつかれ、俺の膝をまくら代わりに寝ている。

昔はよく3人で昼寝をしていたが・・・、相変わらず美春の寝顔はかわいいな・・・。

「ん・・・。」

美春は寝返りをうつ。

すると、白衣が肌蹴、懐のホルスターに入ったコルト キングコブ
ラが見えた。

このコルトは、春美と美春・・・二人の母親の遺品の一つであっ
た。

もう一つ、父親の遺品であるコルト アナコンダは春美が持っている。
る。

元武偵であった二人の両親は、矢橋の爆弾事件に巻き込まれて亡く
なった。

武偵でもないのに銃を携帯して・・・やっぱり忘れたくない
のだろう・・・。

俺は美春の頭を軽く撫でた。

サラサラとした髪はとても手触りがよかった。

相変わらずだな……。

それから3時間後……。

手術室から先生が出てきた。

「先生、春美は……？」

立ち上がることもできないため、座ったままであった。

すると先生は俺の前に座った。

「一応、手術は成功した。でもね、かなり体力を消耗しているから油断はできない。君も美春ちゃんももう休んだ方がいい。仮眠室なら空いているからそこで眠りなさい」

「分かりました」

俺は美春を背負い、仮眠室に向かった。

仮眠室にたどり着き、中に入る。

中はシャワー室、トイレまで有る……。

ベッドは一つしかないんだがな……。

俺はベッドに美春を寝かせ、俺は近くの椅子に座り、机にうつ伏せになるように眠りに就いた。

しばらく眠りについていると、揺すり起こされた。

「ん……、どうした？」

「薫さん、もしかしてここで寝てらしたんですか？」

「ああ」

「なぜ私をベッドに寝かせてくれたんですか？」

「女の子を椅子なんかで寝かせられるか。それより、まだ夜中だろ？まだゆっくり寝てろよ。春美の手術は成功したそうだ。でも、まだ油断はできない……」

「そうですか……。薫さん、ベッドで寝てください。私が椅子で寝ます」

「ダメだ。お前がベッドで寝ろ」

「しかし・・・」

「いいから寝ろって・・・」

俺は再びうつぶせになる。

すると、俺は美春に腕を掴まれ、ベッドに押し倒された。

「何の真似だ？」

「貴方が頑固だからです」

「それはお前の方だろ」

「・・・そうかもしれません」

そう言った美春の顔は、とても申し訳なさそうな表情をしていた。

「でも、薫さんにはこれ以上の迷惑をかけるわけにはいきません・・・」

「なら・・・退いてくれ」

「できません・・・」

「なんでだ？」

「・・・すみません」

なぜ今謝るんだ・・・？

しかし、美春がこんなに力強く押さえつけてきたのは初めてだ。

まあこのくらいの力ならすぐにどうにかなるのだが、雰囲気がそうしてくれない……。

「言うておくが、俺はまだ、お前らを仲間だと思っている」

俺がそういうと、美春の力が緩んだ。

「勝手かもしれないが、春美、美春……。お前らは俺の最高のチームメイトだと今でも思ってる。そんなお前を、椅子なんか眠らせられるわけねえだろ……」

「……………私も……………同じなんです……………。仲間だと思っているから……………親友と思っているから……………」

俺は美春の言葉に少し驚きを感じた。

コイツも俺を仲間だと思ってくれていたとは夢にも思わなかった……。

「……………わかった。でも、お前もベッドで寝ろ。俺は左側で左側をむいて寝るから……………」

俺はそう言っ、ベッドの左側に寝転び、美春と顔を合わせないようにした。

「……………はい」

美春はそう言うと、なぜかくつついてきた。

同じ方向を向いて…………。

「おい、なんでこっち向くんだよ？」

「不安なんです…………、姉さんのことが…………」

「…………正直、俺もだ…………」

俺はそう言って、目を閉じた。

「明日、一緒に姉のところに行きましょう…………」

「ああ……………」

美春はおでこを俺の背中に当て、眠りに就いた。

俺も眠りに就いた…………。

10弾 A capital fellow (後書き)

姫澤 春美^{はるみ}(17)

髪色：藍色のロングストレートヘア

眼色：サファイアブルー

身長：157cm B：A70

武装：コルト アナコンダ 6in

美春の双子の姉。

心臓病を患っていて、治療中。

声が出せないのは、喉を薬品で負傷したため、今はスケッチブックを使い、会話をしている。

字質・速さ共にプロである

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4352z/>

緋弾のアリア～薬物科の武偵～

2012年1月9日23時47分発行